

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第六集 下巻

波多江地区史料調査報告

一九八二年

福岡県教育委員会

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第六集 下巻

波多江地区史料調査報告

一九八二年

福岡県教育委員会

波多江地区史料調査報告

目次

- (一) 波多江庄について
- (二) 波多江氏の系譜
- (三) 原田氏の興亡と波多江氏の動向
- (四) 中世土豪屋敷としての波多江佐二氏宅地
- (五) 波多江地区の波多江諸家所蔵史料について

(一) 波多江庄について

福岡県糸島郡前原町波多江地区は、江戸時代には筑前国志摩郡波多江村とよび、福岡藩黒田氏の所領であった。同藩の大儒貝原益軒の著『筑前国統風土記』巻之二十三志摩郡の項には、「波多江」として、次の記載がある。

舊記に曰、志摩郡波多江庄は、本は波多部と號す。天長三年八月十四日改めて波多江と號す。上代は此所迄海辺にして、西山岸根に至り迄入海なりしか、後世に至り埋りて田となれり。又、此所はも

と怡土郡の内也。寛平八年志摩郡に属す。天喜三年八月多久・篠原を割て怡土郡に入らる。原田種直か弟、三郎種貞初て此所に住す。是によりて其氏を波多江と稱す。種貞より代々波多江に住す。

この「波多江」に関する貝原益軒の所説は、その後、吉田東伍『大日本地名辞書』（明治42）、清水正健『莊園志料』（昭8）などに継承されて、定説の位置を占めてきた。例えば、前書は「波多江」の説明を、「周船寺の西南に接する村名なり、統風土記云、波多江は旧庄号にて、又波多郡と号す、昔原田種直が弟三郎種貞、其氏を波多江と稱す、種貞より代々波多江に住す」と記し、後書は「波多江庄」今郡中に波多江村存す、の 徵証 として、「筑前統風土記引舊記曰、志摩郡波多江庄は、本は波多部と號す、天正三年八月十四日、改めて波多江と號す」と述べており、いずれも益軒の説をそのまま引用したかの観がある。もっとも、この益軒の説が依拠した前出の「舊記」とは、永禄十一年（一五六八）波多江上総守種宗入道崇含（波多江家二十八代の当主）が著した『勤舊記』とみてよい。同書の一節に、

波多江庄者、元怡土郡之内也、寛平八年被入志摩郡、天喜三年八

月割多久・篠原被入怡土郡、天永二年大藏朝臣種房蒙朝恩領此
砌、正治二年同種貞篠原邑西岳構小荘住焉、

とあるのが、これを示唆している。もっとも、波多江地区の周辺には、古来、郡荘規模の怡土庄のほか、原田庄・長野庄などが存在したが、波多江庄に関するかぎり、その実在を示す史料は、右の『勸舊記』以外には見あたらない。したがって、波多江庄の立庄時期や疆域の具体的内容についても明らかでなく、前者については、おそらく大蔵原田氏の下にあった波多江氏宗家の所領を、みずから波多江庄と私称したとも推察されるし、後者については、『糸島郡誌』(昭²)のいう「往昔波多江と云ひしは、今の波多江の外、池田・高田・太郎丸及多久・篠原の地」を中心に拡大したものとみられるのである。

(二) 波多江氏の系譜

波多江氏の系譜および事蹟を知るには、青柳種信編『筑前統風土記拾遺』の編集手伝いを命じられた児玉琢の著書『改正原田譜』本編八巻・続編二巻、その孫韞による『児玉韞採集文書』、原田芳則著『原田正統系譜』、波多江諸家に存する『波多江系図』、『糸島郡誌』などがあるが、このほか右の『改正原田譜』を原拠として波多江氏を専論したものに、山前四郎編『波多江氏族』¹⁾全がある。

これらの諸文献・史料によれば、波多江氏は原田氏の分流とされ
ているので、ここでは原田氏との関係から見ることにする。「原田
系図」等によれば、原田氏の遠祖は、後漢の靈帝の曾孫、阿智王と
いう。阿智王は、魏の興起によって、帯方郡に移住していたが、応
神天皇の二十年、自己の親族・党類らを率いて日本に帰化し、大和
高市郡檜前村に移って東漢使主の姓を賜わり、のち十五代の春実
に至って大蔵朝臣の姓があたえられたという。もっとも、一説によれ
ば、後漢献帝の子昌武王が南漢の霸王となった後、十四代の阿多部
王が孝徳天皇の大化年中に日本に帰化して、天皇より大臣の礼を賜
わり、高貴王と称し、播磨の大蔵谷に代々居住したため、大蔵を氏
とするようになったともいう。いずれにせよ、大蔵春実は、「原田
系図」などによれば、平安時代の天慶三年(九四〇)五月、対馬守
に任じられ、藤原純友の乱の討伐のため小野好古らと共に西下し、
筑前博多において戦功をあげ、征西將軍に任じられた。そして、豊
前・筑前・肥前・対馬を管領、筑前御笠郡檜城で九州の兵馬の権を
にぎり、同七年二月、檜城の麓、原田に新たに築城(原田城)して、
ここに居住した。こうした経緯から、春実は原田氏中興の祖ともい
われるが、一般にはその嫡子泰種(大宰貴主、長門守)を原田祖、二
男種章を秋月祖、三男種季を美氣祖、四男種門を江上祖、五男春近
を原祖、六男種通を三原祖としている。泰種の後、原田氏は種光・
種弘・種資・種納・種衝(一説に「始称原田氏」)・種雄・種直とつづ

くが、種直の弟、敦種（のち種貞）は美氣種名の養嗣子となり、波多江と氏を改めたという。なお、「波多江系図」などでは、美氣氏の祖、種季の後は種主・藤主・藤種・種房・公種・種名とつづき、この間、天永二年（一一一一）五代目の種房が筑前国波多江庄を領したとみなし、種名の跡には原田種直の弟、敦種が養嗣子となり、敦種は種貞に改名したとする。こうしたわけで、一般に波多江氏の始祖は種貞ということ定着している。ところで、山前四郎編『波多江氏族』^全では、「大蔵春実を以て第一世となし、種貞を以て第九世となす、是れ普通世に知られたる波多江氏系図に従へるなり」と記し、その列伝に「第九世種貞」より書き起こしている。しかし、波多江諸家の系図等を見ると、確かに右の説と同じく大蔵春実を始めとする例もあるが、後漢の高祖光武帝まで溯らせるもの、種貞を初代とするものなどがあって、必ずしも一定していない。ここでは、種貞を波多江氏初代として見ることにしたい。

『波多江系譜卷』などによると、初代の種貞は波多江別当三郎と称し、大宰大監に任じられたが、寿永二年（一一八三）平家の西海道漂泊に際して奉公、大いに忠功を尽し、嘉祿二年（一二二五）に没したという。もっとも、没年代については誤りで、彼は元暦二年（文治元年、一一八五）豊前背屋の浦で源範頼の軍に敗死したとする説もある。種貞の後は、種遠（波多江太郎、又号坂井兵衛。寛元三年三月没）・種純（太郎入道。建長七年七月没）・種高（次郎、左近将監。堀地

遠弘のため由井浜で被害、正元元年六月没）・種頼（小次郎。弘安五年二月没）・種信（五郎。乾元元年六月没）・種年（次郎、のち主税助。正和元年十月没）・種忠（小次郎、のち左衛門尉。正中二年三月没）・種興（五郎左衛門。建武三年に多々羅浜合戦に大功あり。暦応三年二月没）・種家（三郎、のち大炊助。文和四年十二月没）・種資（雅楽助。至徳三年四月没）・種友（次郎兵衛、のち種世。応安七年足利義満の九州退治下向に際して征西將軍官方に属し、門司関・大宰府にて武勇大功あり、菊池武政の感状つく。応永二十二年十月没）・種徳（播磨守。嘉吉三年七月没）・種夏（久松丸、武蔵守。寛正六年三月没）・種光（兵庫助。文明十五年二月没）・種盛（惣五郎、のち左衛門大夫。応仁元年洛中の大乱に際して大内政弘に属し、赤松政則・細川元貞等を討取り大功あり。延徳三年四月没）・種兼（松千代、若狭守。文龜三年四月没）・種広（中務少輔。永正五年將軍足利義種の周防山口より上洛に際し、大内義興に属して洛北舟岡山で軍功あり。享祿三年十二月没）・種敦（藤若丸・五郎、土佐守・丹波守。天文十一年正月没）・政宗（上総守^{合カ}・丹波守。入道宗倉）とつづく。

政宗は種宗とも称し、前出『勘舊記』の著者でもある。政宗には嫡子基宗（称太郎、長門守）・二男鎮種（小次郎、上総守。元龜三年吉井浜で戦死）・三男鎮賢（小三郎。豊後在府）・四男種安（四郎、隠遁して徳応寺開師）・五男宗康（備後守）・六男宗能（対馬守）の六子があり、それぞれが一家をなすか、または出家した。各家の系統を示すと、まず、嫡子基宗には、種廣（左馬之助。天正十九年七月没）・種則

(小次郎、上総介)・種宗(平十郎、左馬丞)の三子があり、種賡の子種栄(藤太郎、のち藤右衛門。寛永元年六月没)の直系が現在の波多江大治氏となる。種則、種宗の事蹟については後述するが、なお種宗には種成(宇右衛門)、種和(久右衛門)の二子があった。次に、鎮種には種顕(雅楽助、小金丸民部の養子)・基行(次郎四郎、父と同じく吉井浜で戦死)の二子がある。さらに、鎮賢には種賢(丹波守。初め池田三郎基賢と称す)、種時(忠兵衛)の二子、ついで種賢に種連(藤若丸、民部少輔。天正年中の生の松原合戦に功あり。慶長十九年二月没)・種好(種遠、左京進)・基教(四郎兵衛、右近亮)の三子があり、最後に、宗康には宗憲(備後太郎左衛門)・種豊(彦次郎)の二子があった。このように波多江氏一族の分流は非常に多く、これらが戦国末期には原田氏の麾下にあって、各種の戦闘に活躍するのである。

(三) 原田氏の興亡と波多江氏の動向

原田氏中興の祖、大藏春実が天慶三年(九四〇)五月、藤原純友の乱に西下して以降の事蹟については、すでに前項(二)でふれたとおりである。その後、寛仁三年(一〇一九)四月、刀伊賊が対馬・杵岐をへて筑前怡土・志摩・那珂・早良各郡に侵入したとき、原田種光および嫡子種村らは防戦に努め、これをよく退けたが、種資にいたって従前の御笠郡原田城より那珂郡岩門城に移り、岩門権頭とも

いわれた。嘉承元年(一一〇六)十一月、種資は出雲国の流人で前対馬守源義親の侵略を討ち、大宰大監・筑前権守に任じられている。

種資より種納・種衝・種雄をへて種直の代になると、彼は平清盛の養女(宗盛の女)をめとり、大宰少弐に任じられたが、治承四年(一一八〇)六月、清盛が後白河法皇を六波羅に押籠めたとき、種直は弟の美氣三郎敦種(改名して波多江種貞)ら随兵三〇余騎でこれを守護したという。壽永二年(一一八三)平氏が敗れて、安徳天皇を奉じて大宰府に奔ったとき、種直は二、〇〇〇余騎を率いて守護し、天皇を大宰府から岩門城に移し、その忠功によって筑前守に任じられた。文治元年(一一八五)二月、種直は弟種貞らを率いて豊前葦屋浦で源頼朝の軍と戦ったが、敗れ去り、波多江種貞は下河辺庄司行平に射られて戦死したのであった。三月の壇の浦合戦では、種直は菊池隆直らと三〇〇艘をもって先陣を承り、源義経の軍船八四〇艘と戦い大敗、安徳天皇は海中に身を投じ、平氏一族は滅んだ。源頼朝は戦後、原田種直・波多江種遠らを鎌倉に幽閉したが、建久元年(一一九〇)には種遠を、同八年には種直を赦免して、前者には旧領地の波多江庄を、後者には旧本領のうち怡土をあたえた。波多江種遠は、その後暫く鎌倉に在住して畠山重保誅伐などに軍功をあげ、正治二年(一一二〇)十一月、筑前波多江庄に帰った。

原田氏の勢威は、平家滅亡と種直幽閉を契機に、一時急激に衰退

した。しかし、種直は、怡土郡の鎮守高祖大菩薩の社務上原兵庫と結んで次第に勢力を挽回、近辺を押領して、筑前国中にその武威を振るうにいたった。こうした動きは波多江氏の場合においても見られる。安貞二年（一二二八）の鎌倉幕府執権北条泰時・連署同時房の下知状によれば、幕府は「筑前国怡土郡庄内武田中三ヶ村水田八十町押領地停止事」として、雷山千如寺に対する坂井五郎なる者の押領をとどめて同寺の直務としている。その根拠として、「去文治三年六月七日、給千如寺怡土庄一郡安堵御下文」の趣意にもとづくものというのであるが、この坂井五郎は波多江種信と推定されており、おそらく文治元年後の旧領没収、寺領編入の地を、後年になって実力で回復しようところみ、紛争となつたのであろう。

これより先、承久の乱では、原田種直の孫種秀が朝廷方に味方して北条軍と宇治に戦い、種秀以下、池園種直・波多江頼直・石井資治らが敗死した。頼直は波多江種信の弟である。この敗戦は、原田氏には相当な痛手となつたはずであるが、その孫種次、種頼父子は、建長五年（一二五三）協力して高祖城を築いている。蒙古襲来の際、文永の役では原田種照が奮戦して戦死し、弘安の役では原田種之・種房父子が活躍、敵の首級四〇〇を高祖山麓に埋めて高麗寺を建立した。波多江氏の戦闘ぶりを示す文獻はないが、これに参加したことは疑いを容れぬところであろう。

元弘三年（一三三三）鎌倉幕府の滅亡に際して、九州の少弐貞

経・大友貞宗・原田種遠らは相議して鎮西探題北条英時を早良郡姪浜の館に攻め、またその一族をも滅して九州を鎮定し、その後、少弐・原田氏等みな上洛した。まもなく建武新政が破れ、建武三年（一三三六）二月、足利尊氏が京都から筑前に奔り、宗像・少弐氏に助力を求めたとき、原田種時と次男種貞ら一族は殆ど尊氏に味方したが、嫡子種宗および波多江種興らは菊池武敏ら宮方に与みして、三月の多々良浜の戦いに軍功をあげた。しかし、結局は敗れ去り、原田種宗は高祖へは帰らず、原家を継いでいる。その後、原田氏は少弐氏との関係上、武家方（北朝）に味方してきたが、延文三年（一二五九）菊池武光が九州探題一色直氏らを京都に奔らせると、少弐・松浦・原田氏らは征西將軍宮懐良親王に帰順した。しかし翌年七月、原田種勝らは少弐氏を中心として叛き、康安元年（一三六一）の多々良川の戦後、再び帰順するにいたった。

貞治元年（一三六二）十月、斯波氏経が九州探題として下向したのを機に、大友・少弐・宗像・松浦の諸氏と、菊池武光を中心とする原田・秋月・三原・波多江氏らが筑後金出郷の長者原に陣、菊池勢は斯波氏経の軍勢を破り、さらに豊後にこれを攻めて京都に奔らせた。右の長者原の戦では、宮方の先陣をつとめた原田・秋月勢のうち波多江忠直ら二〇〇人が討死したという。ここに征西將軍宮を戴く菊池氏は、九州二島を従えるにいたった。応安四年（一三七一）將軍足利義満は今川了俊を九州探題として、周防の大内義弘を

副えて下向させ、菊池勢と筑後に戦いこれを高良山に後退させたが、このとき菊池勢の波多江種高らが戦死している。その後、同年、義満はみずから九州平定のため進発せんとして、まず山名・赤松・大内氏らを派遣したが、これに対して原田・秋月・三原・波多江の一派は菊池氏に与みして豊前門司関に出陣、幕府軍を破って周防の国府へ退けた。このとき、波多江種友（種世）が大いに戦功をたてたという。しかし、九州の諸勢、特に原田氏以下に動揺があり、幕府方に転向して少貳氏の麾下に入ったため、菊池氏は敗れて衰勢にむかい、応永三年（一三九六）の大内義弘による菊池、少貳討伐によって屈服するにいたった。

その後、大友親世が家を興して強大化し、また大宰少貳貞頼も筑前・肥前のことを掌った。一方、大内義弘の没後、その子盛見は周防・長門・豊前・筑前の守護職となり、永享三年（一四三一）大友氏の所領である筑前糟屋郡の立花城を抜いたが、怡土郡深江の合戦で敗死した。このとき、原田種泰は大内氏を援けている。しかし、盛見の次弟持世は大友、少貳を抑えて、大内氏の勢威大いに振った。嘉吉元年（一四四一）赤松満祐が將軍足利義教を殺害、ここに原田種泰は満祐を播磨に攻めて自殺させた。一方、種泰は大宰少貳教頼が幕府の命で大内氏の追討をうけると、大内氏を助けて教頼を破っている。かくして、肥前・筑前の武士はみな大内氏に属し、九州探題渋川教直が姪浜城、原田種泰が高祖城、秋月種繁が秋月城、筑紫

教門が原田城にそれぞれ割拠して、筑前を割領する形勢を示した。

応仁の乱の勃発に際し、原田種親は、大内政弘の催促によって一家の種家、波多江種盛以下の同族・国人衆を率いて上洛し、西軍の山名宗全に協力、その軍功によって親種の子五郎は大内政弘の諱をもらい、原田弘種と称した。くだつて明応五年（一四九六）、少貳政賢が怡土郡に押寄せて高祖城を攻囲したとき、郡内の武士は防禦に努め、大内義興の来援によって危急を脱している。その後、原田興種は、大内氏の幕下として毎年周防山口に参勤しているが、永正八年（一五一一）八月、將軍足利義尹を戴く大内義興と、これに対する細川政賢が洛北の舟岡山に戦ったとき、興種は波多江種広・小金丸種連らを率いて先鋒に進み、政賢を討ち滅ぼして、義尹より軍功を賞する感状をあたえられ、所領を増された。

天文二十年（一五五二）九月、大内義隆がその家臣陶晴賢に襲われて自殺すると、晴賢が山口城主となった。しかし、大内氏の旧臣が服従せぬため、翌年三月、晴賢は豊後の大友義鎮の弟八郎を大内義長と称させ、晴賢・義鎮相結んで近国を支配したが、原田隆種（入道了榮）が義隆の恩顧を慕って陶氏に服さず、ここに陶、大友両氏は部将を派遣して原田氏を攻撃させた。ところが、怡土郡の王丸・西・森田・庄崎氏のほか、早良・糟屋郡の原田旧盟の国人等が約を破って陶側に与みしたため、二十二年四月隆種の高祖城は陥った。このため隆種は蟄居して時のいたるを待ち、弘治元年（一五五

五) 陶晴賢が毛利元就に攻め滅されるにおよび、高祖城に還った。同年三月、大内義長も元就によって山口を攻略されると、豊・筑・肥の大内氏所領はすべて大友氏の支配下に入り、隆種もまた暫く大友氏の麾下に属することになる。次の史料は、永祿六年(一五六三)十一月、大友宗麟が波多江政宗(または一男の鎮種)にあたえた感状である。

(1) 前一日雷山欲令放火盜賊張本并党類等尋擄取、政所正被渡之

由、心掛之段神妙候、恐々謹言、

(永祿六年)
十一月十二日

(政宗又(鎮種))
波多江上総守殿

宗麟(花押)

右の文面の「政所」とは、大友氏が志摩郡においた両政所(柑子岳の臼杵氏を東政所、小金丸親山の日野氏を西政所という)のいずれかを指すが、いずれにせよ、波多江氏も原田氏と同様、大友氏の勢力圏内でその指揮をうけていたことがわかる。

当時、筑前御笠郡の岩屋城主高橋元種は、大友宗麟に怨恨をいだき、宝満山に拠って叛旗をひるがえした。時に原田隆種、病いと称して出兵せず、密かに毛利元就と通じて大友氏に叛き、永祿十年九月には、波多江氏らの協力を得て、大友幕下の西鎮兼を怡土郡長石村の宝珠岳城に攻め滅ぼした。翌十一年四月、大友方の戸次鑑連・臼杵鑑速・吉弘鑑理らと、毛利に与みする立花鑑載・高橋鑑種・原田了榮の子親種らとが、立花城を中心として攻防を展開し、同城は

大友方の手中に陥ちた。この間、了榮は大友方に参加せんとした柑子岳城主臼杵鎮麿の虚をついて同城を収めたが、臼杵は途中引き返して、これを奪回、両者の対立は激化の一途をたどった。一方、同年夏、竜造寺隆信が筑前怡土郡に侵入、了榮は波多江氏らと鹿家峠に防いだが利あらず、その孫五郎を人質として和を講じた。ついで、大友方の手中にある立花城の奪回戦が展開され、それに参加した原田親種は敗れて高祖城へ走った。父の了榮は、いそぎ原田親秀入道に兵三、〇〇〇余をもって生の松原に救援に赴かせた。このとき波多江鎮種・基宗・宗康および種賢も参加、敵方の戸次勢、後藤隼人佐以下四、〇〇〇人と対戦して、これを退け、種賢(九)は後藤隼人佐を討ち取った。時に八月二日、第一次生の松原の合戦である。

(2) 昨日於生松原、親秀入道依御合力、乗案利祝着之至候、猶殘党

誅戮之儀、各御助成頼存候、恐々謹言、

(永祿十一年)
八月三日

親種(花押)

波多江上総守殿

同 長門守殿

右の文面の親秀入道とは原田了榮の弟、武蔵守親秀、親種は了榮の四男で、兄たちの死によって了榮の相続人となる。波多江上総守・同長門守は波多江政宗の子鎮種・基宗を指している。

翌十二年春、大友宗麟と竜造寺隆信は和を講じ、原田了榮も再び大友氏の幕下に入った。同年夏、毛利元就の大軍が豊前・筑前にた

押し寄せが、周防国内の内によって毛利勢は本国へ退却、ここに大友宗麟の武威大いに振るい、諸国の豪族・国人らはすべて豊後府内へ参勤・伺候するようになった。こうした中で了榮の波多江左馬介に対する次の土地宛行状などは、在地領主たる原田氏とその家臣波多江氏との関係を示すものであろう。

(3) 式町地事宛行者也、

永禄十一年三月十六日

了榮

波多江左馬介殿

これより先、弘治元年の知行改めと奥書のある『高祖家士知行目録』をみると、まず「高祖御所御領」として、筑前国一万九、七六三町・筑後国七、三七七町・豊前国六、五二一町・豊後国一、三七〇町・肥前国五、六八二町・杵岐嶋二四〇町・対馬嶋三五一町、総計四万五、五一九町(但し、一町 \parallel 六〇に換算して、二七三万一、一四〇石)の存在を示し、原田氏の「御家門衆」二〇人、「御一族衆」九人とその換算知行高が記してある。このうち、「御家門衆」にふくまれる波多江氏は、同讃岐守五万石・丹波守三万七、〇〇〇石・長門守二、六〇〇石・右近将監二、〇〇〇石とあるが、しかし一町 \parallel 六〇石の換算といい、原田氏の領域といい、殆ど信憑性を欠く記載内容となっている。一方、『原田領地石高附』には、「怡土郡高祖城主原田信種領分事」として、筑前一万九、七六三町・筑後七、三七七町・豊前六、五二一町・肥後一、三七〇町・杵岐二四〇町・対馬

三五〇町、 \sphericalangle 三万五、六二二町(但し、一反 \parallel 六斗に換算して、二二三、七三〇石)と記されている。なお、「御家門衆」の波多江氏の所領は、同讃岐守八三町(五〇〇石)・丹波守六一六町(三、七〇〇石)・長門守四三〇町(二、六〇〇石)・右近将監三三〇町(二、〇〇〇石)とある。この記載にも「天正之頃之人數」を挿入した部分があって、俄かに信ずることはできないが、前書よりは若干実態に近いものといえよう。

『原田家系・鬼木勲記』をみると、「怡土郡高祖本城 原田筑前守種直二十三代之將、原田弾正少弼隆種入道了榮・同下野守信種領分」として、「怡土郡 一円。志摩郡 一円。早良郡 従大川西。那珂郡之内。肥前松浦郡。同草野郡。」と記されており、原田氏の支配領域をよく示している。なお、同書は、引きつづいて「高祖侍帳」として、幕下国士十二人衆・家門(二人)・七臣(七人)・大老(六人)・中老(二十四人)・軍配(?)・役職不知(一人、後略)を記しているが、右の幕下国士十二人衆のなかには「前原岳篠原城主 波多江讚岐守」、「波多江高辻城主 波多江丹後守」、中老には「小倉山口預之 波多江兵庫」の名もみえる。同書は後代の記載(写し)のためか、人名に欠落の部分があるが、この点は『原田家士記』の「原田家中大名小名外様侍迄改名附」によって補正することも可能である。この後書では、中老(一人)のあとに旗頭(三人)をおき、先の波多江兵庫を旗頭のなかにふくめている。このほ

か、軍配(三人)・役職不知諸士(二二四人)の氏名も明記して、後者のなかに波多江内蔵之助の名もみえるが、彼らは「從中老以下、地方取候分也」というように、その大部分が地方知行取だったようである。右の両書を詳細に検討するとき、原田氏の本・支城配置や一族・家臣団の構造特質など、かなり明らかにするはずであるが、ここでは本題から外れるので省略することにした。

元龜二年(一五七一)正月、肥前松浦郡の岸岳城主草野鎮永(原田了榮の二男)と、筑前怡土郡の吉井城主吉井隆光は境界争いのすえ、了榮が深江豊前守をもって和平を勧誘すれども応ぜず、鹿家峠を越えて吉井深江城下を焼き払った。時に吉井浜に野営中の波多江・小金丸らに対して、草野鎮永の軍勢が襲撃し、波多江鎮種・同次郎四郎ら三十六人が戦死したが、草野、吉井らは大友宗麟の下知によって和睦した。一方、同年冬には柑子岳の政所、臼杵鎮氏が原田了榮の今津毘沙門参詣の帰途を襲い、このため了榮は池田河原の合戦において鎮氏以下の首級をあげた。大友宗麟は了榮による臼杵鎮氏の滅亡を憤り、原田の刎首を要求した。時に、了榮の子親種が切腹、臼杵氏の執事がこの首級の引渡しを求めたため、了榮は大いに怒り、柑子岳の奪取と宗麟への反抗の意志を固めた。

天正六年(一五七八)十一月、大友宗麟が日向耳川の戦で鳥津義久の軍に大敗、他方、竜造寺隆信が筑前への進出をはかると、筑紫広門・秋月種実ら大友氏に叛くもの続出し、ここに原田了榮も隆信

の勧誘に応じて、大友幕下の国人らを攻めた。かくして翌七年七月、戸次道雲ら大友方の武將は原田氏の高祖城攻略をはかり、寄手四、〇〇〇人をもって姪浜から乗船、横浜に着陸しようとした。了榮は、原田種守・波多江種賢らを鎮守の曲輪に控えさせる一方、原田藤種・深江豊前守らを白石坂、日向峠などに差向け、みずから曲輪に立って指揮した。そして、立花勢を周船寺河原に退け、さらに波多江種則らが追撃、生の松原に戦って大いにこれを破った。これが第二次の生の松原の合戦である。ついで、了榮が柑子岳城の木付鑑実を攻囲すると、立花道雪はこの救援のため軍勢一、五〇〇人を發し、了榮が派遣した鬼木・石井・波多江・小金丸氏ら一、五〇〇人と生の松原で対陣、八月十三日月明の下に戦鬪を展開して、両者痛み分けのまま各本城へ引き返した。しかも柑子岳は同年冬に開城、志摩郡すべてが原田氏の支配下におかれることとなった。次の史料は、了榮が波多江甚助にあたえた感状である。

(4) 去十四日、立花衆出張之刻、於生松原掛合、兩虎之戦難決勝負之處、其方以賢宜慮、見合輕一命遂一戦、於鎚下宗徒之者討取、以其勢殘党不全候事、感悦候、仍而二拾町之事令加増候、所望之地於有之者、志摩郡配分之刻可付候、連々高名数度之手柄、向後不可在忘却、弥無二忠節可為祝着候、恐々謹言、

天正七年八月廿五日

了榮(花押)

波多江甚助殿

これ以外にも、原田了栄または子信種より波多江氏の各自に宛てた感状があったはずである。それは『波多江氏系譜卷』の種連の条に「幼名藤若丸、號民部少輔、(略)天正年間、原田信種與立花道雪、於生松原合戦之時、有軍功、從信種賜感書」とある記事によっても推察されるのである。なお、同年十一月の筑前早良郡油坂などでの合戦で軍功のあった波多江種則(種乘)に対して、次の感状があたえられている。

(5) 今度於油坂合戦之時、敵数輩討捕無比類候段、令感喜候、弥可被励軍忠儀肝要候、仍如件、

天正七年十二月二日

了栄

波多江小次郎殿

原田了栄の老衰後、その養子原田信種は、実父である肥前の草野鎮永入道宗楊が原田家の諸事を進止するのを原田一族とともに快しとせず、これを知った肥前の岸岳城主波多信時は草野、原田両家を侮り、各々の所領の境界にある山川をしばしば押領しようとした。時に天正十二年三月、波多、原田両氏は若干の差纏れを契機に深江で対戦、信種は波多氏の軍勢を破り、これを唐津に奔らせた。次の二史料のうち、前者は原田信種が波多江種則(種乘)・種宗にあたる知行宛行状、後者は原田了栄・信種が種賢の四男基督教に宛てた知行宛行状である。

(6) 長州入道事、今度於草野戦死、忠儀之至催感涙候、然者長州一

跡之内、志摩郡志登村水町之儀、对小次郎種乘兼而讓状等打渡置之由申之、既左馬允雖為本主、讓状頗然之上者、不及論小次郎可被知行候、此外一所無別儀左馬允可為領主、对左馬允相当之地、依忠節可被宛行之旨、種兼申談候、恐々謹言、

天正十二年五月十一日

(原田) 信種(花押)

波多江小次郎殿

波多江左馬允殿

(7) 為加恩五町地之事、宛行訖、弥可被抽忠貞之状、如件、

天正十三年八月廿三日

了栄

信種

波多江四郎兵衛殿

同年三月、竜造寺隆信が肥前有馬で薩摩軍に討たれると、肥後に南の国人が島津氏の麾下に属し、九州の形勢は大きく変貌した。ところが同年秋、豊臣秀吉は大友宗麟の子義統に使者を送り、西国の武士はすべて秀吉に従うように伝えたが、これに応えたのは大友義統・筑紫広門・立花統虎・高橋紹運のみで、薩摩の島津氏は秀吉を蔑視し、筑前の秋月種実・原田信種、肥前の竜造寺政家および筑後の竜造寺幕下もみな島津氏に従っている。もっとも同年十一月、原田信種は、次の史料にみるように、波多江種則が先非を改めて大忠を抽んじたとして、十町歩の知行宛行状をあたえている。このことは、秀吉の九州支配という新しい動きのなかで、波多江氏が島津、

大友のいずれを選択するかの問題に直面、動揺し、結局は原田氏と行動を共にすると決意したことを示唆するものであろう。

(8) 改先非可抽大忠之由にて誠神妙之至候、仍拾町地之事行者也、

弥可被励懇忠之儀、專一ニ候、恐々謹言、

天正十三年十一月十五日

信種(花押)

波多江彦次郎殿

翌十四年六月、島津義久は筑紫広門・高橋紹運を攻めて、降服または自殺に追いこみ、九州にその勢威を誇った。ここに秀吉は、八月、黒田孝高・安国寺惠瓊らを先発させ、また毛利・吉川・小早川らの諸軍勢に山陽道を下らせた。時に原田信種は、島津方に加担して豊前小倉に上方勢を迎撃しようと考え、まず様子を窺うため波多江種貞・笠興長を赤間関(下関)まで派遣した。両使が秀吉への敵対を不可能とさとり、浅野長政らを介して、原田信種の降参の使者だと申し伝えると、秀吉は非常によろこび、両使を召して九州軍のようすを尋ね聞き、腰物を下賜したうえで、信種も島津征伐の先手に加わるよう伝言した。両人は急ぎ高祖城に帰って右の趣意を伝えた。また、小早川隆景が原田氏を討つとの噂が伝わると、原田の同族以下諸氏も秀吉への降服を勧誘したが、信種これを承引せず、かくて原田一族と国人らは徹底抗戦の態勢をとることとなった。次の史料は、大宰府・岩屋城攻撃の際、波多江鎮賢の二男種時が島津方に属して戦鬪に従事したことに對する、島津義久の感状である。

(9) 今度属薩州勢、宰府岩屋城責、戰場数日粉骨無越度働有之由、

義弘書状見届、神妙之至感悦候、恐々謹言、

天正十四年八月二日

(島津義久
朱印)

波多江忠兵衛殿

秀吉軍を迎え撃つ原田勢は、高祖城の原田信種以下、小金丸・牧園・波多江ら二、〇〇〇人、各所の要害すなわち長垂山には宮田大膳・波多江兵庫助ら五〇〇人、油坂には笠興長・長野監物ら五〇〇人、日向嶺には泊丹波守・三島隠岐ら六〇〇余人が固めるという陣容である。しかし、十二月の小早川隆景の降服勧吉と、その大軍による包囲、黒田孝高の家臣久野四兵衛の一番駆けなどにより、信種は高祖城の攻防戦もせぬまま降伏、その城外退去に従う家臣は黒木・波多江・木原・山崎・笠・有田・平山・中園・上原らの諸氏であった。

天正十五年三月、豊臣秀吉は小倉に着陣した後、五月には薩摩の島津義久を降伏させ、その帰途、筑前博多において大名の知行割をおこなった。彼は原田信種の旧領、筑前怡土・志摩・早良三郡(一説に那珂半郡、肥前草野郷も加う)を没収して、筑後の黒木家実の先知行地のうち三〇〇町(二万八、〇〇〇石)をあたえ、佐々成政の与力として肥後に遣わした。翌十六年四月、成政が前年の肥後国人一揆勃発の罪で切腹した後、信種は新たに加藤清正の与力となった。文禄元年(一五九二)四月の朝鮮出兵の折、原田信種は清正の部将と

して渡海して戦死したが、信種の部下には怡土郡の武士が非常に多く参加しており、そのなかに波多江平左衛門の名もみえる。信種の没後、その子嘉種^(善)が跡をついだが、清正の命に従わず、その怒りをもって領地を没収された。その後、嘉種は唐津城主寺沢広高の驛客となつて二、〇〇〇石を領し、寛永十四年（一六三七）の島原の乱には天草に出兵、戦功をあげたが、寺沢氏の滅亡により保科正之のもとに身を寄せ、二、〇〇〇石をあたられて会津に住んだ。

豊臣秀吉の九州征伐後、原田信種・嘉種と行動を共にした波多江基宗の二男種則は、「終始従仕信種及有此漂浪」という運命に翻弄されながらも、遂には怡土郡長野の地に退隠し、その弟種宗もまた、「波多江舊墟」の地に帰農する身となったのである。なお、基宗の嫡子種廣の孫種一（藤右衛門、天和三年没、八八歳）が、子の利種・種久に譲った田地は各々三町三反歩・二町七畝であり、利種（長三郎、元禄十六年没、七七歳）が三子に譲った分は一町五反歩・四町三畝歩・三町七反歩であった。近世前期に、かつての在地の小領主が地主手作経営を展開していく姿を象徴している。

（四）中世土豪屋敷としての波多江

佐二氏宅地

中世の波多江氏一族は、現在の波多江地区を中心として、怡土・

志摩両郡その他に多く散在した。前述の「高祖侍帳」における波多江高辻城主の波多江丹後守、前原岳篠原城主の波多江讚岐守、小倉山口預りの波多江兵庫、さらに原田信種に従つた波多江種則の怡土郡長野郷退隠など、例挙にいとまがない。『糸島郡誌』雷山村の史蹟名勝の項に、「波多江氏宅址 篠原の北二町、五町分と云ふ所にあり、今畑となる」とあるがごときも、その一例といえよう。ところで、こうした中世土豪としての波多江氏の住居址（遺構）は現存しないのであろうか。

『筑前国統風土記』は、「波多江」の項で、(一)に掲げた記事に引きつづいて、「今に波多江村の内に、丹波屋敷と云所有。是波多江丹波か居たりし宅の址也。四方大堀をかまへ、高築地あり。今は田と成て、楠松など猶殖れり」と記したあと波多江種則の事蹟にふれている。江戸時代の元禄年中（一六八八〜一七〇三）まで、四方を大堀に囲繞された高築地の屋敷が依然として厳存していたことを物語っている。一方、『筑前国統風土記附録』は、波多江村「丹波屋鋪」の項で、「二方に堀の址残り。字をツイヂといふ。此所に宇右衛門といふ者あり、」と記し、慶長年中の黒田長政の福岡築城時以来、宇右衛門家が代々、例年早米を公厨に捧げたことの由来にふれている。同家が近世初期に帰農し、福岡藩主黒田家と新穀の早米捧呈をつうじて関係のあったことがわかるが、また同時に、戦国時代以来つづく同家の屋敷地が、少なくとも寛政五年（一七九三）ご

るまでには二方に堀の址を残すだけまでに変貌しているのである。

『糸島郡誌』波多江村の史蹟名勝の項は、「波多江丹波守宅 大字波多江の西南二町にあり。今田字を築地（つくじ）といふ。波多江丹波守種敦が宅地なり。二方に堀の趾あり。此の外にも、村口に広宅の址あり。」と記しているが、これは昭和初年代に入るまで、右の近世後期の状態を伝存したことを物語るものである。その現状はどうかという、通称「丹波屋敷」は六〇畝四方で、これを圍繞して樹木に覆われた幅五畝の土塁址、その内外に、幅五、六畝程度の内堀と、いまでは殆ど埋没して原型を僅かしかとどめぬ外堀の遺構が確認され、近年には、屋敷地続きの場所から土器類も出土している。

この「丹波屋敷」に居住した戦国時代の波多江丹波守の名前が何かを検討する必要がある。『波多江系図』では、波多江種敦を土佐・丹波守、その嫡子政宗を上総守・丹波守としているので、右の『糸島郡誌』の「波多江丹波守種敦が宅地」とする記述は殆ど正確とみてよい。もっとも、政宗の三男鎮賢の嫡子種賢も丹波守を称している点に若干留意すべきである。なお、政宗の直系としては、基宗―種賢―種栄（種喜）―種一―利種……とつづくが、基宗の三男種宗（左馬助）の嫡子種成が宇右衛門を称し、しかも波多江佐二氏所蔵の天保二年作成の略系図に、「築地屋敷」と肩書した波多江左馬助の子孫が代々、宇右衛門を称しているのを見ると、「丹波屋敷」が有力な中世土豪屋敷であったことは確実であろう。

(五) 波多江地区の波多江諸家所蔵

史料について

波多江地区に現存する中世土豪屋敷の遺構を、文献史料の面から究明する意味をかねて、昭和五十五、六年度にわたり、波多江諸家所蔵史料の調査を実施した。この場合、本来の目的を達成するためには、右の遺構関係以外に、往時の波多江氏の動向を示す中世史料の発見が必要不可欠であることはいうまでもない。しかし、近年とみに消滅の傾向にある諸史料の保存に資することも重要課題のひとつであるので、中世・近世・近代の諸史料はすべて整理・分類の対象とする、いわゆる徹底的な悉皆調査の方法をとった。

その具体的方法としては、すべての史料を判読して分類カード、史料袋の表に記入し、まず大まかな分類をおこなった上で、カードおよび史料袋に整理番号を付す。そして本格的な分類は、史料所蔵者の家より持ち帰ったカードを再検討した上でおこなうという手順をとる。以上の作業の結果、出来あがったのが、『波多江諸家所蔵史料目録』である。史料所蔵者は、波多江稔・同正美・同大治・同佐二の各氏であるが、その所蔵史料の内訳は次表のとおりである。ここでは、中世の波多江氏に関する調査に則して、史料の概要を記しておきたい。

〔表1〕 波多江諸家所蔵史料数の内訳

波多江	稔	355冊	438通	—	19袋	35綴	3枚	541点
〃	正実	159	34	2巻	4	4	38	144
〃	大治	1	1	2	—	—	—	4
〃	佐二	2	2	—	—	—	—	4
計		517冊	475通	4巻	23袋	39綴	41枚	693点

〔波多江稔氏所蔵史料〕

同家の所蔵の史料数は、今次調査対象のなかでも圧倒的に多く、中世史料は写しをふくめて九点（一冊・一綴・七通）を数えた。写しがあるので、当然重複の分もあるが、従来知られていた史料が少なくないとはいえず、予期せぬ成果を得ることができた。その大部分は、末尾の「中世史料追加一覧」に収録している。なお、中世史料ではないが、安永六年「原田系図」、「筑前原田系図」は、「原田家中大名・小名・外様侍役名付之覚」や波多江家関係の由緒書などとともに、原田氏の歴史の変遷や波多江氏との関係を知るうえに役立つ史料である。

〔波多江正実氏所蔵史料〕

同家所蔵の史料数は、波多江稔家に次ぐが、中世史料は四点（一四通）ですべてが写しで、そのなかに偽文書もふくまれている。むしろ、重要なのは、「原田正統系図」

『波多江氏系譜巻』などの系図類に加えて、かの著名な「改正原田正統（一〇巻）」が完全なかたちで伝存していることである。県文化会館には、後者の続編二巻がコピーされているが、これによって正編八巻を補うことも可能である。このほか、原田氏の変遷を確度の高い史料によって叙述した『高祖古城記』、原田氏一族・家臣らの所領や家臣団構成をうかがわせる『高祖家士知行目録』・『原田領地石高附』、あるいは『原田家士記』などがある。これらのうちには後世の編述のため誤りもみられるが、厳密な史料操作のうえで利用すれば、ある程度は役立つはずである。

〔波多江大治氏所蔵史料〕

同家所蔵の史料は四点であるが、『波多江氏系譜』巻一・二は、波多江氏一族の概要を把握するうえで特に重要な系図である。

〔波多江佐二氏所蔵史料〕

同家の所蔵史料数も四点であるが、このうち『波多江氏系図』は、簡潔な記載内容ながら、中世土豪屋敷の遺構である同家の由来を確認するうえで役立った。なお、同家が近世初頭帰農して以後の、福岡藩主黒田家との関係を示すものとして、『志摩郡波多江村御献上早米由来書写』などがある。

波多江氏関係の中世史料のうち、従来蒐集・調査の分は、児玉琢『改正原田譜』続二巻(A)、『児玉韞採集文書』(B)のなかに収録されている。これらは今次調査の分と当然多くが重複するが、前々項(B)の本文中に掲載した各史料(1)～(9)と、次に掲げる「中世史料追加一覧」(10)～(22)について、波多江稔氏所蔵の『波多江家感書写』(C)、同じく一紙文書(D)、および波多江正実氏所蔵の一紙文書写(E)等との、重複関係を表示することにする。この(1)～(9)および(10)～(22)の諸史料が、現在までに判明した波多江氏関係の中世史料(近世初期の分を一部ふくむ)である。

〔表2〕 波多江氏中世関係史料所蔵・収録分一覧

史料番号	史料所蔵および収録	史料番号	史料所蔵および収録
(1)	(A) (C)	(10)	(B) (C) (D)
(2)	(A) (C)	(11)	(A) (C) (E)
(3)	(A)	(12)	(B) (C) (D)
(4)	(A)	(13)	(B) (C) (D)
(5)	(A) (B) (C)	(14)	(A) (B) (C)
(6)	(A) (B) (C)	(15)	(A) (D) (E)
(7)	(A) (B) (C) (D)	(16)	(A)
(8)	(A)	(17)	(B) (C)
(9)	(A) (C)	(18)	(C)
		(19)	(B) (D)
		(20)	(D)
		(21)	(D)
		(22)	(D)

(註)
 (A)『改正原田譜』続編、(B)『児玉韞採集文書』、(C)波多江稔氏所蔵『波多江家感書写』所収文書、(D)同氏所蔵の一紙文書、(E)波多江正実氏所蔵の一紙文書写。

◇ 中世史料追加一覽 ◇

(10) 内山源太郎先知行半分評別紙在之預置候、速可有知行之状、如件、

天正五年三月九日

了榮 (花押)

波多江丹後殿

(11) 其方事、池田下河原合戦之剋、一番鎧仕、今度又於鉢窪生松原姪浜所々、莫大之働不可勝計候、因茲、志摩郡潤村之内、七町加増宛行畢、倍可被励軍忠者也、

天正六年七月五日

了榮

波多江丹後守殿

(12)

加冠

長資

天正七年正月十二日

了榮 (花押)

波多江力丸殿

(13)

坪付

末永 三郎丸谷
一所三段半 一々五段
山北 西堂
一々式段 一々三段

西入部
一々式段

以上耆町六段

天正八年二月三日

了榮 (花押)

波多江平左衛門殿

(14) 度々依軍忠有之、於速見郡犬丸村拾町地宛行畢、全自務可抽奉公之節者也、仍如件、

(天正十一年九)

八月三日

義統

波多江彦次郎殿

(15) 一昨日、生松原於八窪合戦、立花勢押払、無比類手柄申成疎二候、每度被抽忠勤之条、感悦之至二候、為加恩志摩郡井田原名吉地拾貳町宛行候、弥重而可任望也、

天正十三年二月五日

信種

波多江民部殿

(16) 今度天草本戸之城切崩之剋、働無比類候、任所望庄内におゐて先知并武田民部丞屋敷之事宛行候、愈忠貞可為肝要也、

天正十七年十二月十三日

信種

波多江兵庫殿

(17) 乘陣已後、以狀雖可申候、其表陣取等不可有寸暇候条、令用捨候、今度別而馳走心懸之段、親家預入魂候、乍案中祝着候、義統爰元へ居陣申候上ハ、諸軍之辛勞粉骨茂可為此節候之条、度々可申進候、猶重々可申候之趣、委細曰杵新介方江申含候、恐々謹言、

天正十三年九
閏八月廿日

義統書判

波多江上總守殿

(18) 前廿五、高鳥居取崩候烈、別而被碎手数ケ所被疵、高名之次第感悦候、必以時分一稜可賀候、恐々謹言、

八月廿七日

統虎書判

畑江掃部丞殿

(19) 備後守望之由、可存知候、恐々謹言、

十二月七日

義鎮(花押)

石井宮内丞殿

(20) 尚々用事有之節、無心置可申越候、以上、

当春之嘉慶不可有望期候、其許始一族之面々、無別条令越年、目出度事二候、我等息災迎青場候条、可易遠情候、然者一昨九日、樋山津右衛門兼子庄作方迄書状到来、令披見候、兼而於肥

前国唐津表吟味相尋候筋有之、金龍寺唯禪和尚へ為申遣置候処、去夏中右使其方儀相勤候由、餘程懸隔候場所、乍老躰不厭勞契經數日精誠相尽、懇ニ遠探索候条、旧恩不相忘義之ハ乍申、忠志之次第、感悦無極候、仍而為礼儀書状遣候、委祥老共方可申候、恐々謹言、

正月十一日

有田宗鐸老

原田又助
種美(花押)

(21) 猶以先祖因幡守儀、对当家忠勤之者、令尋出事二候、以上、懇令染筆候、兼而於肥前国唐津表吟味相尋候筋在之、金龍寺迄申遣置候処、其方儀擢衆人右使相勤、餘程懸隔候場所、乍老躰不厭勞契經數日、精誠相尽、懇ニ遠探索候条、旧恩不相忘義之ハ乍申、忠志之次第感悦無極候、仍而為褒美鎚一鋒為取之候、委祥猶期来喜候、恐々謹言、

三月十五日

有田宗鐸老

原田又助
種美(花押)

(22) 一書啓告、先以其境何茂安寧之旨承、悦不斜、当境家中無異儀令勤侍事候、然者金竜寺海禪和尚巨細之染簡、漸到舊臘令落掌候、随而桃源院七回忌、玄徳院一周忌之辰共、各寺詣香華作善

靈奠式拾菩提所令修務、被悃誠之旨、寔以通代之恩露未乾、仰高祖靈之德輝照於未牧裔葉之餘歟、一回愁一回如斯屢令感慨、殊勝神妙之至覺候、併互隔千止萬水都鄙之便宜疎遠ニ而、平素雖絶通交候、猶不可忘舊恩候、俸餘万般期後音之佳節候条、不能委祥候、恐々謹言、

九月十五日

原田友八
壽種(花押)

原田又助
種連(花押)

波多江平九郎殿

同 順 市殿

同 彦 七殿

波多江今郎助殿

同 弥 平殿

同 玄 瑞殿

同 市郎次殿

同 忠 六殿

上 原久兵衛殿

波多江七右衛門殿

波多江又 六殿

同 吉 平殿

同 理右衛門殿

同 孫 六殿

同 三右衛門殿

同 順三郎殿

上 原 助 市殿

有 馬 助 七殿

波多江 太郎助殿

(以上)

後 記

今回の波多江氏関係史料調査にあたっては、史料御所蔵の各家には多大の御協力をいただき、また九州大学文学部国史学研究室の左記の方々及び前原町教育委員会に御助力をお願いいたしましたので、ここに記して感謝します。

柴多一雄(九州文化史助手)

池畑裕樹・佐伯弘次・折田悦郎・岩元修一(以上大学院生)

宮崎克則・梶原良則・高橋和広・八百啓介・大館邦浩(以上四年

生)、小宮木代良・井川智晴(以上三年生)

(丸山雍成)

波多江諸家所藏史料目錄

波多江諸家所蔵史料目録

目次

波多江稔氏所蔵文書	21	ハ 土地・物品売買	30
A 中世史料	21	ニ 金 融	32
B 系譜・由緒書	21	1 借用証文	
C 政 治	23	2 貸借関係書類	
イ 触 達	23	3 諸 講	
ロ 村役人	23	ホ その他	36
D 財政・租税	24	F 社 会	37
イ 年貢・諸役	24	イ 村明細・人別	37
ロ 地租改正	27	ロ 世相・風俗	38
E 経 済	27	ハ 冠婚葬祭	40
イ 農 業	27	ニ 曆・占	41
1 田畑・石高等		G 交 通	41
2 地主小作関係		H 学問・文芸	41
ロ 他の産業	29	イ 学 問	41
		1 儒学他	
		2 実 学	
		ロ 文 芸	44

1	紀行・軍記物等	
2	和歌・俳諧等	
3	絵画・諸芸	
ハ	教育	48
1	教訓書・手鑑	
2	中・小学教科書	
I	宗教	53
イ	神祇	53
ロ	仏教	54
J	日記・記録	55
イ	日記等	55
口	書状	56
ハ	雑史料	56
K	絵図・地図	57
	波多江正実氏所蔵文書	58
A	中世資料	58
B	系譜・由緒書	58
C	政治	59
D	財政・租税	60
E	社会	60

F	学問・文芸	61
イ	学問	61
1	儒学他	
2	歴史・地誌	
3	実学	
ロ	文芸	64
1	和歌・俳諧等	
2	諸芸	
ハ	教育	65
1	教訓書・手鑑	
2	中・小学教科書	
G	宗教	66
イ	神祇	66
ロ	仏教	67
H	日記・記録他	68
	波多江大治氏所蔵文書	69
	波多江佐二氏所蔵文書	70

波多江 稔氏所藏文書 (一九八〇年二月一〇日 調査)

A 中世史料

史料名	年月日	形態	摘要	数量	整理番号
大友義鎮官途状	十二月七日	豎紙(楮紙)	石井宮内丞宛	一通	四九
原田了栄預ケ状	天正五年三月九日	豎紙(楮紙)	波多江丹後宛	一通	五〇
原田了栄加冠状	天正七年正月十二日	豎紙(楮紙)	波多江力丸宛	一通	五一
原田了栄坪付状	天正八年二月三日	豎紙(楮紙)	波多江平左衛門宛	一通	五二
原田信種感状写	天正十三年三月五日	切紙(斐紙)	波多江民部宛	一通	五三
原田了栄・信種連署宛行状	天正十三年八月二十三日	豎紙(楮紙)	波多江四郎兵衛宛	一通	五四
原田友八寿種・原田又助種 参連署書状	九月五日	折紙二紙	波多江平九郎他一八名宛	一通	三九
原田又助種美書状写	正月十一日、三月十七日	書綴	有田宗鐸宛	一綴(一通)	三二
波多江家感書写	年代不詳	書冊	立花統虎、大友宗麟他方	一冊(四通)	三七

B 系譜・由緒書

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
波多江家書類写	年代不詳	波多江内蔵介識	一冊	三六

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
<p>慶長年中より万延元年申年迄役儀世代調子名元書上控 志摩郡波多江村組頭波多江文四郎世代書上申事 原田了栄信種怡土郡高祖御在城之節志摩郡波多江村又六先祖代々名付仕上ケ申覚 原田了栄信種怡土郡高祖御在陳之節志摩郡波多江村又六先祖代々名付仕上ケ申覚 先祖之覚 原田了栄信種怡土郡高祖御在城之節志摩郡波多江村又六先祖代々名付仕上ケ申覚 原田系図 筑前原田系図 原田家中大名・小名・外様侍役名付之覚 自會津到来原田氏書翰写 波多江村弥右衛門家由緒書 志摩郡波多江村庄屋波多江爲四郎乍恐御願申上ル口上之覚 某書状 黒田家系譜写(仮題)</p>	<p>万延元年十一月 文久二年十月 丑五月二十一日 年代不詳 年代不詳 丑五月二十一日 安永六年八月 年代不詳 年代不詳 文政五閏正月二十三日 万延一年十一月 明治四年一月 年代不詳 年代不詳</p>	<p>波多江内蔵介識 波多江種壽 (原田伊豫守五〇年忌の法事執行の書状を含む) 谷村民事御方宛(家作建替願とその由緒) (家の由緒等) (長政と吉兵衛迄)</p>	<p>一冊 一綴 一綴 一綴 一綴 一綴 一綴 一綴 一冊 一冊 一冊 一綴他 一綴 一通 一通 一通 一通</p>	<p>四 三八 三四 三三 三 三 三五 五七 五八 二六 五九</p>

C 政 治

イ 触 達

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
御宸翰写	慶応四年四月二十三日	波多江村長為四郎写	一冊	四七
触 達	明治初年	福岡藩庁方士卒族、神職、大庄屋宛（維新後の心得方）	一綴	六六
布 達	(明治五年) 三月十九日	浜地新九郎の志摩以下一ヶ村庄屋衆中宛（鉄砲改）	一冊	六七
福岡県庁達控	明治六年六月二十三日	各区々戸長中宛	一冊	六八
福岡県庁達控	明治六年六月二十三日		一冊	六九

口 村 役 人

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
波多江村庄屋組頭役儀年数 并年名書上候事	文化十五年四月	波多江村庄屋弥右衛門、他	一通	六〇
志摩郡波多江村庄屋又三郎 乍恐申上ル口上之覚	文久二年十一月	波多江村庄屋又三郎の大庄屋浜地新九郎宛 (慶長年中の役儀永統之者詮議の件)	一通	二八
志摩郡元岡触志登村外五ヶ 村庄屋・組頭御願申上候 事	元治二年正月	志登村庄屋惣三郎他方早良・志摩・怡土御 郡役所宛	一通	六一

D 財政・租税

イ 年貢・諸役

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
志摩郡潤村庄屋又三郎、乍恐御願申上ル口上之覚	元治二年二月、他	潤村庄屋、大庄屋格又三郎、早良・志摩・怡土御郡役所宛（病氣老衰に付、庄屋役儀御免願） （組頭役、老齢により御免願）	二通	六二
組頭波多江八郎申上之覚	年代不詳		一通	六三
波多江村庄屋組頭名	年代不詳		一通	六四
村會議員任命書	明治十四年二月	波多江村戸長波多江次郎、波多江為四郎宛 （村方引継文書の分類目録）	一通	七一
記	明治初年（九）		一冊	五一

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
志摩郡波多江村面役相勤申分書上申候目録	延享一年五月十六日	岡本加兵衛、波多江村庄屋宛	一通	七二
某村御年貢米之内御足シ左之通可相弘証拠之事	宝暦十年三月	波多江村庄屋組頭、岡村加兵衛宛（御給人様三二人の知行、村中御救の願）	一通	一六
志摩郡波多江村百姓中御願申上ルニ付、乍恐庄屋組頭仕上ル口上之覚	宝暦十二年閏四月	波多江村庄屋市三郎、源次郎様御役所宛 （年貢米一、三五六俵）	一通	七三
波多江村払目録	明和八年十一月	波多江村庄屋市三郎、源次郎様御役所宛	一通	七四
志摩郡波多江村御米・大豆津出執行申分書上之覚	明和九年九月	波多江村庄屋、津田源次郎宛	二通	七五

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
志摩郡田尻村相談役増給米 渡方波多江村御郡用米之 内方御渡・請取一件 波多江村仕上ル指出之事	安永四年十一月 天明五年八月	波多江村庄屋方庄野兵左衛門宛 波多江村庄屋市内方花房左兵衛宛(宿米不 指出、他の件)	一通	七六
波多江村御免用諸普請御改 書上帳	文化六年正月	伊藤五郎太夫御役所宛 (村財政)	一通	七七
文政十年亥村雜用算用	文政十一年(九)	郡役所宛(旱損年貢御免願)	一通	七八
天保七年御年貢米・大豆上 納引付写	天保八年(九)	里正又三郎	一通	七九
怡土郡井田村庄屋組頭乍恐 口上之覚	嘉永五年九月 嘉永三年六月十八日	波多江村庄屋又三郎 波多江村庄屋・庄屋方早良・志摩・怡土御 郡代役所宛 太助方波多江村為四郎宛(割石代并 の請取)	一通	八〇
辺田潟御開発一件公役出方 心得御達諸品私方夫役賃 錢并御酒頂戴被仰付候分 一切控帳	嘉永六年十二月 安政五年正月	波多江村庄屋又三郎 波多江村庄屋・庄屋方早良・志摩・怡土御 郡代役所宛 太助方波多江村為四郎宛(割石代并 の請取)	一通	八一
年貢上納之覚	文久二年閏八月二十二日	波多江村庄屋又三郎 波多江村庄屋・庄屋方早良・志摩・怡土御 郡代役所宛 太助方波多江村為四郎宛(割石代并 の請取)	一通	八二
村備米代錢ニ備替仕候旨御 伺申上候事	文久二年十二月	波多江村庄屋又三郎 波多江村庄屋・庄屋方早良・志摩・怡土御 郡代役所宛 太助方波多江村為四郎宛(割石代并 の請取)	一通	八三
請取申事	元治元年一月	波多江村庄屋又三郎 波多江村庄屋・庄屋方早良・志摩・怡土御 郡代役所宛 太助方波多江村為四郎宛(割石代并 の請取)	一通	八四
文久二年御年貢未進仕ニ付、 拙者抱左之田地永代ニ壳 渡代錢請取申証證之事		波多江村庄屋又三郎 波多江村庄屋・庄屋方早良・志摩・怡土御 郡代役所宛 太助方波多江村為四郎宛(割石代并 の請取)	一通	八五
元治元年潤村仕組ニ付、入 用錢取替置分、請取差引 残預置内宮川江借用 分記		波多江村庄屋又三郎 波多江村庄屋・庄屋方早良・志摩・怡土御 郡代役所宛 太助方波多江村為四郎宛(割石代并 の請取)	一通	八五
		合綴(二綴)	五〇六	

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
長州御征伐御出陣二付、御地頭様召達人足出方之者 江苦勞金渡方根帳	元治一年九月	庄屋為四郎	一冊	八六
志摩郡波多江村御年貢米大 豆払方相仕廻御算用仕上 ル目録之事	元治一年十二月	波多江村組頭伝三郎・同村庄屋為四郎早 良・志摩・怡土御郡御役所宛	一通	一九
波多江村軸帳・控	年代不詳	(田島年貢)	一冊	八七
年貢皆済目録	年代不詳	浜地新九郎 (田畑物成高)	二通	八八
物成之覚	十一月二十九日	(年貢)	一通	八九
収納日延願書控	年代不詳	波多江為四郎 _ノ 潤村庄屋三嶋菜七宛	一通	九〇
波多江村年貢米・大豆代米 上納願	嘉永四年十一月	福岡県令渡辺清 _ノ 波多江為四郎宛(職猟税 老田受取証)	一通	九一
面役御改二付證抛之事 證	明治四年三月	(田作不作に付、田米穀、儉約)	一通	九二
志摩郡波多江村中連判書物 年貢郷蔵出納帳	明治九年十月三日	(七〇人)	一通	九五
四月廿一日桜井出方夫着到 ひかへ	申年十二月	波多江為四郎、他一名	一通	九六
馬屋物置普請二付加勢諸費 一切控	明治十七年四月	(瓦・杉・松・古竹・酒)	一冊	九七
普請入用覚	年代不詳		一冊	

口 地 租 改 正

史 料 名	年 月 日	摘 要	数 量	整 理 番 号
地租改正御趣意書	明治八年三月		一冊	一三三
現反步地租金百分之三掛帳	明治九年旧五月		一冊	一三四
地 券	明治十年、他	波多江村波多江為四郎	一通	一三五
地券御達写	明治初年代		一綴	一三六
代替二付地所讓渡地券名換願他	明治十七年一月		一綴	一三七
地所讓渡二付地券名換願	明治十七年十一月	波多江為四郎、他 <small>カ</small>	一通	一三八
反別帳	明治二十一年十二月	(波多江彦藏分の地価・地租など)	一冊	一三九
分筆反別更定願	明治二十四年一月	波多江村大字波多江 <small>カ</small>	一冊	一四〇
地目交換一筆限帳	年代不詳	波多江村大字波多江 <small>カ</small>	一綴	一四一
筑前国何郡何村現反步野取帳	明治二十一年 <small>(カ)</small>		一冊	一四二
引替目録	癸酉年	波多江為四郎 <small>カ</small> 福岡県御懸宛	一通	一四三

E 経 済

イ 農 業

1 田 畑・石高等

史 料 名	年 月 日	摘 要	数 量	整 理 番 号
歳々稻把数 <small>并</small> 石高寛帳	天保十三年八月	波多江又三郎	一綴	九八

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
筑前国中石高并郡々村名附帳	元治一年三月吉日		一冊	九
手 覚	年代不詳	(志摩郡波多江村の田畠数、商売諸連上銀など)	一冊	一一
覚	年代不詳	(村中家数并人数など)	一綴	一〇
抱田畠・高書拔	明治六年		一冊	九九
波多江村内諸旧畑之持主覚	明治年間	(波多江村内の波多江為四郎持分)	一冊	一〇〇
反歩帳	明治十二年正月		一冊	一〇一
稲輪数控	明治十五年旧九月		一冊	一〇二
善兵衛殿利吉殿日雇ニ被参候日記帳	明治八年旧四月		一冊	一〇三
井手一件御状、其外共	九月二十四日	次郎吉の弥右衛門宛、他有田村の波田江役場宛	三通	一〇四
井料辻代金(仮題)	寅十一月二十四日		一通	一〇五

2 地主・小作関係

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
志摩郡波多江村畳屋惣右衛門、乍恐御願申上ル口上之覚	文化八年三月	斎藤全宛、他一(腰痛につき摂州有馬温泉湯治願、田地請作証文)	二通	一一七
田地質入代金請取証文	嘉永七年十二月	質入主彦左衛門他一名の	一通	一一八
田地質入仕証文之控	明治二年五月	田地主又三郎、受人彦左衛門の本村文吾宛	一通	一一九
田地質入証文手形	明治二年五月	田地主又三郎、受人彦左衛門の本村文吾宛	一通	一二〇
小作証文之事(雛形)	明治八年三月	有田村某の何村某宛	一通	一二一

口 他 の 産 業

史料名	年月日	摘 要	数 量	整理番号
小作證文之事 小作證文之事 小作證文 小作證文之事 米俵取立帳 小作證文之事 小作證書 田畑小作證文之事 田畑小作證文之事 田畑小作證文之事 口 上	明治九年一月 明治十七年八月 明治十七年一月十二日 明治二十年三月二十一日 明治二十一年十月二十四日 明治十八年二月五日 明治二十二年二月 年代不詳 年代不詳 年代不詳 旧六月二十九日	某方波多江為四郎宛(田七畝二歩) 小作人波多江益太郎方富田甚五郎、他宛 (筑前国志摩郡波多江村四八九番地) 波多江喜右衛門 小作人波多江彦平、他方波多江益太郎宛 藤山新太郎方波多江彦藏宛 (小作証文記載範例) (田畑高不記、小作に関する取決め) (土地・上納関係) 為四郎方惣五郎宛(上納残米一件に付催促)	一通 一通 一通 一通 一通 一通 一冊 一冊 一通 一袋	一一二 一一三 一一四 一一五 一一六 一一七 一一八 一一九 一二〇 一二一 一二二

史料名	年月日	摘 要	数 量	整理番号
明治廿二年度一期中濁酒製造記 明治廿三年鶏育記 絞油開業不仕二付願 山方木持出人足之覚 材木願請所々進物并木挽賃 錢諸入用一切控他 明治卅四年金ヶ崎納炭明細帳	明治二十二年十月四日 年代不詳 明治七年一月 年代不詳 慶応一年 年代不詳	(他に鳥獸免許状、入籍届など) 波多江為四郎方福岡県権参事宛 (天下山、浦志摩、有田山など) (他、諸汽車焚料など)	一綴 一冊 四通 一綴 一冊	一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
鍛冶屋床弁米取立帳 諸刀鍛冶掟・心大概(仮題) 諸国鍛冶鑑 箱崎釜破故卷之巻 実業勤惰表	大正八年一月十九日 年代不詳 年代不詳 年代不詳	(中町組合分) 波多江又三郎治種 波多江虎介写	一冊 一冊 一冊 一冊 一冊	一一二 一一三 一一四 一一五 一一六

八 土地、物品売買

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
請取證文 請取 文政四年御年貢諸上納錢指 申二付、拙者抱左之田 地、貴殿方へ永代相伝ニ 売渡、代錢受取申證文之 事	文化十四年十二月 巳年五月九日 文政四年十二月	永代売主弥右衛門、受人彦次・佐兵衛宛 寺山又六方波多江村為四郎宛 波多江村弥右衛門方同村伝右衛門宛	一通 一通 一通	一九〇 二二 一九一
請取申事 受取證(案文) 受取證	天保九年十一月二十七日 明治九年七月二十四日 明治九年七月	桜井村幾七・貞吉方波多江村庄屋弥右衛門 宛(米一六俵) 波多江為四郎、他一人方十小区扱所宛(金 一六七円五〇錢) 桜井村洞保平方波多江為四郎・増太郎宛(請 取証文)	一通 一通 一通 一通	一九二 一九三 一九四 一九五
請取 受取證	明治二十四年二月五日 十二月二十七日	田上桂林方波多江益太郎宛 波多江好介方増太郎宛	一通 一通	一九六 一九七

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
<p>請取證文 慶応二寅ノ十二月御年貢依指文ニ拙者抱左之田島永代相伝ニ売渡證文之事 居家売渡證文之事 田地永代相伝売渡申證券之事 永代売渡證 永代売渡證 地所売買ニ付地券名換願 地所売買ニ付地券名換願他 返り證 地所永代売渡證 證拋之事 波多江村庄屋弥右衛門書狀 拂物代金 掛物売渡證拋之事 掛物売渡證拋之事 諸 覚 覚 田畑宅地之地価之覚</p>	<p>年代不詳 慶応二年十二月 明治二年五月 明治六年十二月 明治九年四月六日、他 明治九年五月 明治十三年一月 明治十七年 明治十七年十一月二十七日 明治二十年八月十二日 明治三十年十二月 十二月二十二日 明治初年 天保十五年五月 年代不詳 年代不詳 三月二十二日 二月六日 明治年間</p>	<p>浦志村与八ノ波多江村又三郎宛 午山家売主又六ノ波多江村為四郎宛 波多江為四郎ノ岸原儀右衛門宛 波多江為四郎ノ原田伝右衛門宛(田地売渡 關係二通) 売渡人波多江為四郎、他一名 売渡人大門村岸原儀右衛門、他一名 売渡人波多江益太郎、他一名宛 買主波多江益太郎ノ波多江彦七宛(地所買取の事) 売渡人波多江文六ノ波多江益太郎宛 波多江為四郎、他一名ノ寺山又六宛 池田村庄屋良八、他一六名宛(振葉代) (各村農民の分) 宮川右平ノ波多江村庄屋・組頭宛 (金子支払い、他) (一、丸九貫文) (波多江)為四郎ノ原田伝右衛門宛</p>	<p>二六通 一通 一通 一通 一綴 二通 一通 一冊 一通 一通 一通 一通 一綴 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通</p>	<p>一九八 一九九 二四 二〇〇 二〇一 二〇二 二〇三 二〇四 二〇五 二〇六 二〇七 一八の三 二〇九 二一〇 二一一 二一二 二一三 二一四 二一五</p>

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
居家売渡證文之事 記	年代不詳 子九年四月十八日	売人波多江為四郎、他一名(居家一軒外売渡)	一通	二二六
久家村枝郷寺山又六殿居家 相求代金相渡覺	明治二年五月	周船寺村青柳卯平を波多江為四郎宛(仏壇 他代金三円也)	一冊	二二七
売渡證	旧十二月三十日	波多江為四郎代	一通	二二八
仕組ニ付諸品売立代金請取 帳	明治九年一月五日		一冊	二二〇
覺	年代不詳	小金丸村蔵元を波多江村御役場宛(米二四 俵売却代金)	一通	二二二
内用茶油蠟燭砂糖紙類現拂 日記	安政六年正月吉日	里正亦三郎 (御屋敷御注文の馬をめぐる紛議)	一綴	二二三
波多江村庄屋為四郎申出控	寅年九月		一通	二二四
馬屋売渡證	明治十七年四月	売主井上弥三郎を波多江為四郎宛	一通	二二五
金錢支出覺類	年代不詳		一袋	二二五

二 金 融

1 借用証文

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
預り申銀子之事 志摩郡波多江村長吉乍恐御 願申上之覺	正徳四年十月 天保五年十二月	波多江村又七を小金丸村伝内宛 波多江村長吉を早良・志摩・怡土御郡代御 役所(銀一〇貫文拝借願)	一通	一四四
			一通	二二七

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
<p>借用仕米之事 借用證文之事 借用證文 預り手形 借用仕候證文之事 借用仕證文之事 借用證文之事 依御相談ニ左之金御預り申 上ル證文之事 借用證文之事 金借用證 金借用證 金借用證 金借用證 金借用證 借用金返済方半紙證 借用金年賦返済證 借用金年賦返金證</p>	<p>安政二年七月 文久三年十二月 文久三年十二月 慶応三年十二月 明治二年正月 明治二年七月 明治四年十一月 明治四年十二月 明治四年十一月 明治十二年十一月二十六日 明治十四年一月二十四日 明治十五年六月 明治十六年旧二月二十六日 明治十六年八月二十五日 明治十八年一月十五日 明治十一年四月十日 明治十六年四月 明治十八年七月十七日</p>	<p>高来寺村藤助ハ波多江村三右衛門宛 波多江村組頭吉次、他四名ハ岩田嘉八郎宛 (百姓指支ニ付非常御手当金借用) 潤村組頭四名同村庄屋又三郎ハ丸田庄平、 他五名宛(百姓困窮に付) 本村文五郎ハ中町為四郎宛 借用主徳藤寺、彦七ハ当村庄屋為四郎宛 多久村卯三郎他一名ハ有田村又五郎宛 波多江村波多江為四郎、他二名ハ大門村儀 右衛門宛 宮川代次郎宛 波多江為四郎、他二名(正金百両、米三〇 俵の借用) 波多江儀三次、他一名ハ波多江真左衛門宛 波多江為四郎ハ波多江才八宛 波多江益太郎ハ波多江政太郎宛 波多江為四郎、他二名ハ波多江磯七宛 波多江益太郎、他ハ波多江彦蔵宛 (明治一一年借金の一一年賦返済約定) 借主波多江為四郎、他二名、証人富永惣七ハ 西原藤三郎、他二名宛 西原藤三郎、他一名宛</p>	<p>一通 一通</p>	<p>一四五 二〇 一四六 一四七 一四八 一四九 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五四 一五五 一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇 一六一</p>

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
金借用證	明治十三年六月四日	波多江増太郎方波多江治八宛	一冊	一六二
金借用證	明治十四年一月一日	波多江増太郎、他方波多江才八宛	一冊	一六三
金借用證	明治十四年十月二日	波多江六郎方波多江為四郎、他一名宛	一冊	一六四
金借用證	明治十五年六月十一日	波多江益太郎方兒田原亦一郎宛	一冊	一六五
金受取證	明治十八年二月十三日	波多江才八方波多江益太郎宛	一通	一六六
金借用證	明治二十年八月十二日	波多江為四郎、他一名方津田勢平宛	一冊	一六七
地所書入金借用證	明治十六年一月	波多江益太郎方兒田原亦一郎宛	一冊	一六八
書入質金借用證	明治十六年六月	波多江益太郎方波多江半四郎宛	一冊	一六九
書入質金借用證	明治十六年四月二十日	波多江為四郎方	一通	一七〇
地所書入金借用證	明治十六年七月九日	波多江益太郎方池田村三崑藤七宛	一冊	一七一
書入質金借用證	明治十七年一月二十日	波多江為四郎方波多江平四郎宛	一冊	一七二
地所書入金借用證	明治二十一年一月三十一日	波多江為四郎、他方津田勢平、他宛	一通	一七三
地所書入金借用證	明治二十二年二月二日	波多江益太郎、他方徳永卯三郎宛	一冊	一七四

2 貸借関係書類

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
諸口貸附差引日記	明治九年十二月	波多江為四郎種吉	一冊	一七九
当時貸金之覚	亥年十二月二十二日		一通	一八〇
借銀差引算用覚	明治以降		一冊	一八一
返済證書	明治二十二年一月三十一日	徳永卯三郎方波多江為四郎、他宛	一通	一八二
領收證	年代不詳		一袋	一八三

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
證文 證書類 一札	年代不詳 年代不詳 丑年五月二十九日	一朝軒門弟流出方波多江村御役場宛(借用証文)	一袋 四通 四通	一八四 一八五 一八六
借用證	年代不詳		一冊	一八七
午十二月取立覚	午年十二月		一冊	一八八
種雄立替勘定	明治三十五年十月方	岡部栄助方波多江為四郎宛	一通	一八九
約定書	明治十六年五月二十五日	波多江為四郎方波多江磯七宛	一通	一七五
約定證	明治十六年八月二十五日	波多江步六方波多江為四郎宛	一冊	一七六
約定證	明治十七年六月十九日	波多江新四郎方波多江増太郎宛	一通	一七七
約定證	明治十八年一月十八日		一通	一七八

3 諸 講

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
弘化四未年四月座方改置触 中村々仕立講会掛金取立 覚	弘化四年四月方		一枚	七九
文久三年亥四月会座、佐久 間文右衛門様御仕立講取 多分金札候間、左之通度 々請取申覚	文久三年四月方		一綴	二三三
今宿西村次郎吉殿仕立講鋪 證文	明治五年四月	波多江為四郎	一冊	二三四
波多江俊助殿仕立講掛金控	明治三十二年旧十一月		一冊	二三五

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
波多江藤吾殿仕立講掛米 波多江猪之吉仕立講金掛出 控、他	明治三十五年旧十一月 大正年間 <small>(カ)</small>	波多江益太郎	一冊 二冊	二二六 二二七
非常備仕立講講法申合帳 覚 <small>(仮題)</small>	年代不詳 天保十年二月	青柳良平、他 <small>(講の引当人)</small>	一冊	二三八
大宮司様講	元治元年春	<small>(潤村任組調べ、他に浜崎五ヶ浦屋講)</small>	一通	二三九
明治九年子為四郎殿 <small>ら</small> 講備 金預り記	年代不詳		一冊	二四〇
講金借用證	明治十四年十二月二十八日		一通	二四二
頼母子講帳	明治十五年三月	山本梅太郎	一冊	二四三
諸々加入講帳	年代不詳	和助 <small>ら</small> 為四郎宛 <small>(金五十銭の講金受取)</small>	一冊	二四四
記	年代不詳		一綴	二四五

ホ
そ
の
他

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
屋鋪間数改	文久二年七月		一通	二二六
志摩郡波多江村庄屋為四郎 乍恐御願申上ル口上之覚	年代不詳 <small>(他に明治二年五 月の分あり)</small>	<small>(家作虫付に付、建替の件)</small>	三通	二二七
隠居家作入用材木諸品一切 控帳	弘化二年正月 <small>ら</small>		一綴	二二八
居家棟上村中客来大工衆諸 事送物覚帳	明治四年九月二十九日	家主隠居又三郎	一綴	五二六

F 社 会

イ 村明細・人別

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
家財道具一切預物品附帳	明治五年四月	又三郎手控	一冊	二二九
家財道具諸品附控帳	明治六年正月	隱居又三郎改	一冊	二三〇
家財道具諸品附控帳	明治六年正月	(本村文吾方へ品々持遣し候覚)	一通	四一
職人衆工数之覚	年代不詳	(大工人数・手間賃)	一冊	二三一
覚	年代不詳	藤助、他(工数・作料など)	一冊	四三
覚	年代不詳	(米・徳米・夫錢など)	一冊	四二

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
分限帳	年代不詳	黒田藩笠氏	一冊	四四
手鑑	宝永七年四月	(村、浦方明細)	一冊	二六一
元文五年拾壹歳以上本百姓 #女房子共、折立紙御判 仕ル分	元文五年		一冊	二六二
元文五年名子荒仕子#女房 子共拾壹歳以上相書越判 形仕立分書立帳	元文五年		一冊	二六三
志摩郡波多江村人拂帳	天保十三年三月	波多江村(宗門改帳前書)	一冊	二六四
誓紙前書案	天保七年三月写		一冊	二

口 世 相 ・ 風 俗

史料名	年月日	摘 要	数量	整理番号
覚	年代不詳	(唐人の不吉な迷信)	一通	二七一
志摩郡波多江村中切支丹宗門重畳御改被成ニ付仕上候書物之事	安政三年九月	波多江村庄屋又三郎、他五名ノ吉田専右衛門宛	一通	一七〇一
波多江村庄御改帳	慶応四年三月	波多江村庄屋為四郎、同村組頭	一冊	二六五
志摩郡波多江村中切支丹宗門重畳御改被成ニ付仕上候書物之事	年代不詳		一通	一七〇二
宗旨御改ニ付請證拠之事	明治四年七月	波多江村庄屋波多江為四郎ノ原田種生宛 (原田雄太郎とその母の請証文)	一通	二六六
払證拠之事	明治四年四月	肥後国天草郡才津村光蓮寺ノ筑前国志摩郡波多江村徳応寺宛	一通	二〇八
払證拠之事	明治四年四月	肥後国天草郡才津村光蓮寺ノ筑前国志摩郡波多江村徳応寺宛(天草上原村弥平、他四名日雇稼に付)	一通	二六九
払證拠之事	明治四年四月	天草荒川内村観音寺ノ波多江村徳応寺宛 (広吉、他三名)	一通	二七〇
家督相続	明和二年ノ天保五年	(山本家家督相続の事)	一通	二六七
家名相続届、他諸願	明治二十四年二月		一綴	二六八
志摩郡波多江村組頭彦三郎	年代不詳	(親道円奉公の件)	二通	二五

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
志摩郡波多江村仕上ル指出之事	年代不詳	(博突打清吉逃亡)	一通	二七二
原田雄太郎方に強盗押入る事	明治二十四年旧三月十三日	波多江為四郎方洞保平宛	一通	二七三
長寿之人謂書写	寛政八年九月	(一九四才、百姓萬平、他に妻、子、孫)	一通	二七四
長寿者由緒拝領物覚(仮題)	寛政八年九月	(百姓文七、一八八才、妻一六一才)	一通	二七五
長寿者由緒拝領物覚(仮題)	明和三年二月	波多江村役人方御郡代御役所宛	一通	二七六
極々貧窮者御救米願上	文久三年正月	波多江村組頭伝三郎、他一名方早良志摩怡	一通	二七七
志摩郡波多江村庄屋組頭乍	慶応三年十一月	土御郡御役所宛(産子養育難渋に付、御	一通	二九
恐御願申上ル口上之覚		救米の件)		
達書	辛未三月	(とめ母極老に付、二人扶持を下す)	一通	二七八
寡婦給助金領収證	明治二十九年三月	波多江ウタ方福岡県知事岩村高俊宛	一通	二七九
寡婦給助金領収證	明治二十九年九月 日	波多江ウタ方福岡県知事岩村高俊宛	一通	二八〇
救荒便覽摘要	年代不詳	波多江種夫	一冊	二八一
東海道大地震	年代不詳	(各所震度調査)	一通	二八二
波多江村仕上候指出之事	文久二年十月	又三郎方早良・志摩・怡土御郡代御役所宛	一通	二八三
側卵巢囊腫痛ニ附御見舞受	明治二十五年旧四月	(馬吉、他痲瘡のため死去の報告)	一冊	四七八
候品付	昭和二年九月一日	洞セツ	一冊	四七九
波多江益太郎不傷病氣ニ付	年代不詳		四通	四八〇
諸方ヨリ進物控帳	六月十五日	岡部忠孝、他三名方波多江弥右衛門(饑別、	一通	三〇
御客様御見舞覚	八月十八日	世話などの御礼)		
岡部忠孝等四名連署書状		国分長治郎方波多江弥右衛門宛(饑別受取)	一通	二一

八冠婚葬祭

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
志摩郡波多江村仕上ル指出之事	天明三年二月	波多江村庄屋市内ノ花房左衛門役所宛(殿様出府・入国時の祝儀料理)	一通	四六六
婚礼御肴代覚帳	享和三年正月十六日		一冊	四六七
婚姻ニ付、所々ノ見舞請候書状并返書共写、他	弘化四年二月		一冊	四六八
結婚祝会ニ付指合客見舞受候品附	明治二十一年十二月十九日	桜井村洞保平三女セツ	一冊	四六〇
結婚祝会ニ付諸方ヨリ祝儀指合客見舞一切記	明治二十四年旧正月二十二日	波多江てる	一冊	四七〇
婚姻之節進物諸買物一切并ニ指合記録	明治三十九年九月十四日	波多江寅介妻縁	一冊	四七一
波多江三木婚姻ニ付進物記置	大正九年十月十日	(茶吞客より)	一綴	四七二
波多江弥右衛門書状	十一月六日	北原権右衛門宛(嫁入相談の件)	一通	一八の一
祭文	明治二十四年八月	城島警察分署長待鳥干治(一周忌の靈前における告文)	一通	四七五
出産之節諸方ノ見舞進物品付	明治十一年旧六月二十二日	(他に、「八朔節句短冊飴品々弓代」など)	一冊	四七三
種雄祝儀一切買物記	明治四十年旧二月二十四日		一冊	四七四
波多江為四郎盆祭諸方ノ靈前工進物記	明治二十七年旧七月十五日	波多江益太郎	一冊	四七六
巡查波多江彦蔵死亡に付諸費一切記録	年代不詳		一通	四七七

二 曆・占

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
新撰古曆便覽 曆	貞享二年七月 天保十四年、他		一冊	四四九
曆	年代不詳	(天保十五・十六年・弘化三・四・五年・ 明治二・三・四・十四・十七年)	一冊	四六〇
覺書	年代不詳	(雜記——地震占、願成就日、曆他)	一袋	四六一
占書類	年代不詳		一冊	四六二
二十四歳男縁請ヲ占	六月六日		一通	四六三
陽春掛文例	年代不詳	圓角	一冊	四六四
				四六五

G 交 通

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
東海道五十三次(東海道分 間絵図全)	宝曆二年九月吉日	(昭和四年三月裏打ち)	一冊	二四六
東海道・中山道道中記并諸 国所々川道中道のり附 道中鑑	年代不詳	芝、江見屋吉右衛門板	一冊	二四七
江戸御供連名	年代不詳	(赤間関の江戸迄の道中附)	一冊	二四八
旅人滞在銭仕払御聞届帳	寛政十二年九月吉日	毛利内記他	一冊	二四九
波多江村為目養生入込居候 旅人国所名元書上之事	慶応一年十二月 年代不詳	(志摩郡波多)	一冊	二五〇
				二五一

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
長崎船中道中日記 請船申事 志摩郡波多江村百姓所持仕馬之内怪我并病氣馬ニ而作掛り不申打臥居申分乍恐御願申上ル事 御廻郡御道筋村々旧跡并村高人馬民戸共ニ現数控帳 波多江村の道法覚 志摩郡波多江村御願申上ル事 覚 覚 伊勢御宮参りニ付饒別青銭祝之控 嘉永七寅春、伊勢参宮其外所々参詣之節、土産配分仕品付覚 讃岐金毘羅宮参詣船中覚書 北海道鉄道沿線案内	寛延二年 辰年十二月二十八日 元文四年十一月 文政九年二月 天保四年五月 安政五年十月 年代不詳 年代不詳 文政四年六月 嘉永七年 明治八年六月朔日 明治四十三年八月十日	波多江村又六 波多江村又三郎有田村治太夫宛 波多江村百姓与作、他五名白水与左衛門、他一名宛 (文政十三年三月写) 波多江村庄屋弥右衛門の早良・志摩・怡土御郡代御役所宛 波多江村組頭伝三郎、他一名の早良・志摩・怡土御郡代役所宛 (御定賃錢による人馬相對雇) 三原怨平の波多江役場宛(人足一人、今宿迄) 波多江彦助 波多江為四郎種古	一冊 一通 一綴 一綴 一通 一通 一通 一綴 一綴 一冊	二五二 二五三 一五 四八 五 二五四 二五五 二五六 二五七 二五八 二五九 二六〇

H 学問・文芸

イ 学問

1 儒学 他

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
<p>論語(序一、三、六、八) 中庸章句序 孟子(卷一) 孟子(卷七) 孟子(卷十一) 大学 七書 尉繚子(卷一~卷五) 七書 吳子(上・下卷) 七書 黄石公三略(上・下卷) 窮理問答 成章盡稿 難經本義 孝經正文 論說 素問入式運氣論口義(中・下) 皇和四家文譯(四) 說贊論 解伝 集物帖</p>	<p>延享三年春 弘化三年二月 明治十五年三月 明治七年八月</p>	<p>道春 波多江辰吉 (陰陽五行の説) 波多江益太郎</p>	<p>一冊 一冊 二冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊</p>	<p>二八四 二八五 二八六の一 二八六の二 二八六の三 二八七 二八九 二九〇 二九一 二九二 二九三 二九四 二九五 二九六 二九七 二九八 二九九</p>

2 実 学

史料名	年月日	摘 要	数 量	整理番号
農業全書(一~十一) 補註原病式 六氣熱類(三卷) 薬種覚類 薬種 名薬之伝	元禄十年 年代不詳 明治二十年代 昭和三年八月	(薬用治療の雑記) 波多江益太郎	一册 一册 一袋 一册 一綴	三〇〇 三〇一 三〇二 三〇三 三〇四

口 文 芸

1 紀行・軍記物等

史料名	年月日	摘 要	数 量	整理番号
土佐日記(上) 鎌倉太平記 太平記(卷第十五~第十六、 卷第三十五) 武者物語(抄五~七) 続撰清正記(卷第一) 大坂陣拾式段合(写) 慶安太平記(卷之七、卷八 ~十) 博多細伝実録(卷之貳)	承平五年頃(写年不詳) 文政十年正月 正平元年頃(写年不詳) 寛文七年三月五日 元治二年正月 嘉永三年	(軍記物) (天明四年七月購入、波多江喜七)	一册 六册 二册 一册 一册 一册 二册 一册	三九四 三九六 三九七 三九八 三九九 四〇〇 四〇一 四〇二

2 和歌・俳諧

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
嶋原記(巻中) 駒井根元記(四卷) 絵本武勇誉・仙台敵討之事他 眼流嶋敵討記 非人敵討(二之巻) 寝屋の文	年代不詳 文政十三年頃 文政六年三月写 慶応二年十一月写 明治初年(カ)	(丸橋忠弥、由比正雪二件) (随筆)	一冊 一冊 一冊 三冊 一冊 一冊	四〇三 四〇四 四〇五 四〇六 四〇七 三九五

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
和歌聞書集写 古今和歌集(写)(巻第十七、雑上) 古今和歌集(下) 歌枕秋のねざめ 怡土郡高祖神社大宮司上原 安芸守橘朝臣和種君ヨリ、 太宰府に奉納有由ニ而、 予に見せられける歌書留 置 歌林雑木抄 和歌集(仮題) 歌書名目録及書林名付	寛延二年八月 年代不詳 正徳三年一月刊行 正徳二年二月 嘉永五年三月 年代不詳 年代不詳 年代不詳	(新古和歌聞書) (大和歌に詠める名所) (夏の部)	一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一通 一綴 一冊	四二二 四二三 四二四 四一五 四一六 四一七 四一八 四一九

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
嘉永五千子年もろ人に短冊 類詠受之分送り遣候覚 連句・連歌集（仮題） 和歌・俳句集 卯十二月十八日会席夕通題 月次兼題狂歌 里梅 狂歌帖 勸業かぞへ歌 戯場篇 雑記帳 俳諧・蓮のかほり（乾） 月次笠句集 月並笠句集 月次笠句集 月並笠句集 宮地嶽奉納二千句集 宮地嶽奉納二千句集（第二号） 奉納笠句集 奉燈笠句兼題卷 奉納笠句集 奉納笠句兼題拔萃	嘉永五年 年代不詳 年代不詳 年代不詳 天保十四年、他 文政頃 年代不詳 明治年中 年代不詳 江戸末期 天明五年 安政二年仲秋 明治二十四年九月 明治二十四年 明治二十五年二月開卷 明治年間（カ） 明治年間 明治二十四年旧十一月二十 九日 明治二十六年旧八月 明治年間 明治年間	（嘉永七年、和歌一首を含む） （他に、諸地域連中名前） （和歌） 今宿連書写 銅脈先生著（五言絶句、古詩、律詩など） 波多江村三右衛門種里（和歌、薬、好物他） 筑紫風羅堂講中 （他一冊） 潤連	一冊 一冊 一袋 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 二冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 二冊 二冊	四二〇 四二一 四二二 四二三 四二四 四二五 四二六 四二七 四二八 四二九 四三〇 四三一 四三二 四三三 四三四 四三五 四三六 四三七 四三八 四三九

3 絵画・諸芸

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
<p>掛絵 山水之図(上巻) 北斎聚画手本 尺八執心付免許 古様々能沙方之伝 謡曲</p>	<p>年代不詳 年代不詳 明治二十五年版 明治三年一月 昭和三年八月改 年代不詳</p>	<p>波多江又三郎 波多江村又三郎写</p>	<p>一袋 一冊 一冊 一通(他三通)</p>	<p>四五二 四五三 四五四 四四五 四五六 四五七</p>
<p>春清水山奉納一万句集 盆会奉燈集 奉燈卷 魯舟翁靈前燈籠集 姪浜愛宕宮奉納笠巻萬句集 衆評笠句集 酒楽翁賀祝短句集 俳句集 狂俳冠附十会すまひ 短冊 川柳</p>	<p>年代不詳 安政二年初秋 明治十六年三月 明治年間 巳年春月日 明治二十四年旧四月 明治二十五年菊月 江戸後期 江戸後期 明治十五年七月 年代不詳 年代不詳 年代不詳</p>	<p>(川柳集) (笠句集) (笠句集) 地元俳句連中</p>	<p>一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一袋 一袋 一冊 一綴 一冊</p>	<p>四四〇 四四一 四四二 四四三 四四四 四四五 四四六 四四七 四四八 四四九 四五〇 四五一</p>

大成奇術片里伊新法	史 料 名	年 月 日	年 月 日	摘 要	数 量	整 理 番 号
		明治中期		波多江届助	一册	四五八

八 教 育
1 教訓書・手鑑

風月往来 都往来 庭訓往来 (全) 庭訓往来 庭訓往来 庭訓往来 商売往来 商売往来 孝行往来 百姓往来 諸往来 (仮題) 諸往来 (仮題) 筆跡往来 今川状・曾我状・大坂状 節用集 (下九~七五) 早引節用集	史 料 名	年 月 日	年 月 日	摘 要	数 量	整 理 番 号
		文政九年 嘉永四年 嘉永六年四月 年代不詳 年代不詳 年代不詳 嘉永四年 明治五年八月 明治七年 明治九年二月十五日 文政十一年三月 年代不詳 酉年七月 年代不詳 年代不詳 寛政八年		「一品尊円親王御筆」とあり (習字手習) 波多江 波多江益太郎 波多江益太郎	一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册	三〇五 三〇六 三〇七 三〇八 三〇九 三一〇 三一〇 三一〇 三一一 三一一 三一二 三一二 三一三 三一三 三一四 三一四 三一五 三一五 三一六 三一七 三一七 三一八 三一九

2 中、小学教科書

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
地理初歩(全) 日本地誌略(-) 新撰中地理書(一・二) 校刻日本外史(足利氏卷七 九) 新編内国小史(上・下卷) 国史唱歌大絵卷 小学会話篇 小学読本(卷一、二、三) 尋常小学第四読本(上・下卷) 尋常小学第三読本(上・下卷) 小学講義(漢文全書、第五編) 初学入門 修身初訓(-) 修身小学(卷二、三、四、五) 修身教科書(卷の一) 尋常小学修身書(卷一) 分数式題 幾何備忘録 博物学ノート 簿記学ノート	明治七年 明治七年 明治十二年 明治三十二年二月十日發行 明治七年 明治七、十二年 明治十九年 明治十九年 明治十九年 明治二十六年 明治十五年 明治十五年 明治十八年 明治三十五年 明治四十三年 明治四十三年八月 明治二十七年四月 明治末期(五) 年代不詳	山田行元編述 新保磐次著 中村孝也氏校閲 黒田行元 (筆・鉛筆にて記す) (筆にて記す)	一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 四冊 一冊 一冊 一冊 一冊 二冊 二冊 二冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊	三五六 三五七 三五八 三五九 三六〇 三六一 三六二 三六三 三六四 三六五 三六六 三六六 三六七 三六八 三六九 三七〇 三七一 三七二 三七三 三七四 三七五

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
算術筆記 英語覚帖、他 描画帖 漢字訓読帳（卷之一） 作文 講備書類一件 畫筌（卷之五） 證拠 任命證（仮題） 当院教育社人員帳 試験表 試験問題集（仮題） 新築上棟式之歌 校用品購求簿 福岡県私立教育会雑誌（第一号） 試験問題 警察陶冶篇（完） 警察官服務心得（仮題）	明治年間 明治二十二年 年代不詳 年代不詳 年代不詳 明治十四年旧九月 年代不詳 三月十三日 明治七年四月 明治十八年旧二月十五日 明治二十二年四月九日 明治十六年十一月十二日 同月十七日迄 明治二十四年六月十一日 明治二十三年三月以降 明治十八年六月三十日刊行 明治二十二年四月 明治二十二年十一月 明治中期	波多江虎助（他に雜科帳など） （裏紙に百姓の徳米、貢米の記事） 三苦元太郎 林守篤編（絵解き） 文武館受持勝山雄一郎 第一五区調書（小学校世話役申付） 波多江彦蔵 （志摩郡波多江尋常小学校） 前原高等小学校二年生波多江虎助 福岡県私立教育会 （警察官用）	八冊 六冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一通 一通 一冊 一冊 一冊 一通 一通 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊	三七六 三七七 三七八 三七九 三八〇 三八一 三八二 三八三 三八四 三八五 三八六 三八七 三八八 三八九 三九〇 三九一 三九二 三九三

I 宗 教
イ 神 祇

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
<p>太宰府天満宮故実（卷之上） 太宰府天満宮故実（卷之下） 神社仏閣祖師年数 産神社参道寄進證拠之事 弘化三丙午三月、桜井大神 宮御造改之節、御作事所 之文通 志登弥右衛門書状 桜井大宮司様仕立渡人数書 抜 長谷田神御社地掃除順番心 得之ケ条 今度村中奉寄附志摩郡波多 江村十六天神御供田 志摩郡波多江村組頭彦三郎 父道四百姓市平乍恐御願 申上ル口上之覚 志摩郡波多江村百姓大八伝 内伊勢参宮仕候ニ付跡田 島御請申上ル事 志摩郡波多江村頭取百姓彦 助伝右衛門并組合中御願 申上ル口上之覚</p>	<p>貞享一年 貞享一年八月二十五日 天明五年改正 天保九年八月 弘化三年 十一月二十六日 年代不詳 明治二十六年旧六月二十六 日 享保十年十一月（明治五年 写） 文化五年閏六月 文政三年五月 文政三年五月 文政三年五月</p>	<p>原田伝右衛門之庄屋弥右衛門殿産子中宛 今宿猪三郎宛（天満宮の件） 波多江村庄屋・組頭之 伊藤五郎太夫宛（伊勢大神宮参詣の件） 波多江村庄屋弥右衛門、他七名之早良・志 摩・怡土御郡代御役所宛 波多江村頭取百姓彦助、他一九名之早良・志 摩・怡土御郡代御役所宛（伊勢大神宮 参詣願の件）</p>	<p>一冊 一冊 一冊 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通 一通</p>	<p>四八一 四八二 四八三 四八八 四八四 一八の二 四八五 四八六 四八七 一四 一三 一二</p>

口 仏 教

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
伊勢参宮萬御饒別控長 社員章 御神幸御案内 神號皇謚卷 神社参拝帳 本朝神社考(中之三、四) 任命證(仮題) 波多江村山伏大行院先祖代々当山派名跡之覚 起請文	嘉永七年二月吉日 明治三十五年十月十一日 明治年間 明治七年冬 明治二十三年一月 年代不詳 二月四日 年代不詳	筑前国志摩郡波多江中町三右衛門種重 官幣中社宮崎宮宮松講社を波多江益太郎宛 (行事の詳細) 波多江益太郎 波多江為四郎 羅浮子道春撰 官幣中社宮崎宮宮松講社を波多江増太郎宛 波多江村庄屋市内の山口孫作宛	一冊 一冊 一綴 一冊 一冊 一冊 一通 一袋	八 四八九 四九〇 四九一 四九二 四九三 四九四 四九五 五〇三

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
今任地藏堂縁記 子安観世音菩薩福徳圓滿之記 御國中三十三所札納靈場日記写 高雲山徳心寺永代常夜燈建立御國中寄進連名記録 合鑑	安永五年三月 天保十三年正月 弘化三年三月 明和二年七月四日 明治四年十月	(後に連歌集あり) 大台沙門豪潮大律師 安政三年八月三日、里正又三郎治種写 一朝軒役僧	一冊 一通 一冊 一冊 一通	四九六 四九七 六 四九八 五〇〇

丁 日記・記録

イ 日記 等

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
墓地共有連名簿 請取 納所へ出頭の命令書 年代記 雑	明治二十二年五月十七日 戊年五月十四日 四月八日 年代不詳 年代不詳	波多江彦蔵 善導寺納所 ^ノ 波多江村庄屋弥右衛門宛（知行米之内五俵代） 波多江為四郎、他一名宛 法応寺往生記写 （宗教）	一冊 一通 一冊 一袋	四九九 二三 五〇一 四六 五〇二

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
雑科要帖 万日記控帳 萬遠宝恵帳 諸用留書 王代記 明治二十五年旧六月 ^ノ 御定日の費記 年中諸雑種費記	年代不詳 明治十二年正月 安政六年十二月二十七日改 年代不詳 天保十二年三月写 明治二十五年 ^ノ 明治三十九年一月	波多江虎助 波多江増太郎 （万覚帳） 早稲田人 波多江彦助種正 波多江益太郎	一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊	五〇一 五〇五 五〇八 五〇七 四五 五〇九 五一〇

口書状

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
書状		波多江為四郎宛(1)	三七通	五一五
書状		波多江為四郎宛(2)	二二通	五一六
書状		波多江為四郎宛(3)	二四通	五一七
書状		波多江益太郎宛	二二通	五一八
書状		波多江弥右衛門宛	二二通	五一九
書状		波多江又三郎宛	二二通	五二〇
書状雜一括		波多江宛	一袋	五二一
葉書		波多江為四郎宛	一四通	五二三
葉書		波多江益太郎宛	八通	五二四
潤へ遣候手控	七月七日	波多江為四郎と同村利助宛	一通	五二五

八雑史料

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
定記	明治九年一月五日	当家世話人	一通	五二七
鑑札	明治九年三月	波多江為四郎(和銃一挺の所持)	一通	五二八
大阪毎日新聞抜抄	明治十五年旧五月	波多江為四郎宛	一通	五二九
	明治三十五年六月以降		一冊	五三〇

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
戦車献納金追加募集ニ関スル趣意書 衆議院議員有投票権者名簿 證	昭和七年十二月 年代不詳 年代不詳	糸島郡聯合分会長、他 提津村・大依村・六丁原村・四郎丸村・江島村・原中牟田村分 波多江為四郎、他二名を副長戸宛(清図給料・落地給料)	一通 一冊 一通	五三一 五三三 五三二
雑史料(1) 雑史料(2) 雑史料(3)	年代不詳 年代不詳 年代不詳	(断簡)	一袋 一袋 一袋	五三四 五三五 五三六

K 絵図・地図

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
絵図類 日露清韓新地図 日露清韓新図他	年代不詳 明治三十七年三月十日 明治三十七年二月	(他に、日露陸戦方面地図あり)	一袋 一枚 一枚	五二二 五二三 五二四

波多江正実氏所蔵文書（一九八〇年一月九日
一九八一年三月三日 調査）

A 中世史料

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
軍忠宛行状 軍忠宛行状 繪旨他 書状	天正六年七月五日 天正十三年二月五日 年代不詳 十月九日	了米江波多江丹後守宛 信種江波多江民部宛 (偽文書) 原田三郎龍種江波多江儀三郎宛	一通 一通 一通 一通	六四 六五 六七 五一

B 系譜・由緒書

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
波多江氏系譜卷 波多江氏諸家系図及び戒名 (仮題) 改正原田譜 原田家土記 原田家伝并戦功記 筑前国原田家伝	明治七年八月二十四日 江戸末期 年代不詳 寛政五年三月写 明和九年七月三日 年代不詳	橋和種誌(中に書継ぎあり) 波多江儀平種儀、他一名 (原田家中大名・小名・外様侍迄改名付) 石井新六種司写	一卷 一冊 一冊 一冊 一冊	〇 四 五 二 一 二

C 政治

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
<p>原田代々名集記之 原田正統系図 小松重盛卿七百回忌ニ付原 田種直朝臣石塔心 会津祖名明顯録 高祖家士知行目録(上・下) 原田領地石高附 大藏朝臣原田家岩門御所領 地八箇国也 高祖古城記 系図</p>	<p>江戸末期<small>(カ)</small> 明治三十二年五月 明治九年十二月 年代不詳 弘治一年改(写) 年代不詳 昭和四年四月八日 文化二年 江戸末期<small>(カ)</small></p>	<p>(初代より三四代迄) (小松仁祠、龍国寺) (原田種次家系及び由緒書) (怡土郡高祖城主原田信種領分事、および 御家門組衆中の石高) (原田家同族会顧問役名簿ニ支那政府四名 あり) 波多江村波多江種儀 (栗山系図)</p>	<p>一冊 一卷 一冊 二冊 二冊 二冊 一冊 一冊 一冊</p>	<p>一三の六 三 三〇 六 八 九 一〇 六 七</p>
<p>長政公御代覚書 宝永七歳順見上使御下向ニ 附百姓ニ申渡覚書 書状写</p>	<p>天保十四年八月 宝永七年二月 年代不詳</p>	<p>(小川團之助所持之分借請写之置者也) 田尻彦右衛門 (参府御懇の上意に付、御礼御使者派遣あ るの件)</p>	<p>一冊 二冊 一通</p>	<p>四〇 一 四八</p>

D 財政・租税

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
寛文六年檢地帳居屋敷書抜 覚書 年貢一番皆濟褒状(仮題) 殿様御帰国寸志米一俵差出 褒状(仮題) 明治四年米大豆上納間通 改正名寄帳 地券写	明治三年 酉年二月 酉年八月 明治四年 明治八年四月 明治十年六月二十日	波多江儀平写 井出清大夫、他一名波多江村組頭儀平宛、 他 波多江村組頭儀平宛 (他に土地台帳を含む) (志摩郡波多江村二六〇番地)	一冊 五通 一通 一綴 二冊 一綴	四一 四四 四六 一三五 一三一 六三

E 社 会

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
筑前国孝子良民伝(統編卷 之下) 筑前孝子良民伝(統編卷之 中) 八十歳申上之名元御覽濟通 知状(仮題) 祝寿金下付状 窮民救助褒状	寛政六年冬十二日 江戸時代 寅年五月 明治五年 明治四年	竹田定良撰 浅右衛門、平兵衛方義平母宛 福岡県方波多江儀平母宛 福岡県方志摩郡波多江村波多江儀平、他 四名宛	一冊 一冊 一通 一通 一通	一八 七九 四七 二二 四三

F 学問・文芸

イ 学問

1 儒学 他

史料名	年月日	摘	要	数量	整理番号
鷗民救助二付御酒鯛代下賜状(仮題)	巳年十月	波多江村組頭儀平宛		一通	四五
岐志原田角力寄進帳	明治二年八月	大龍山南林寺		一冊	二四
嘉永雜書	嘉永四年三月	須原屋茂兵衛發刊(曆書)		一冊	一五
明治七年甲戌太陽曆	明治七年			一冊	一二九
東坊作九千歳前後於未代萬覚事	明治三年二月	平野藤作(干支による吉凶占い)		一冊	二三
吉凶占書(仮題)	年代不詳			一冊	六〇

史料名	年月日	摘	要	数量	整理番号
下学集(下)	文安一年(写年不詳)			一冊	九四
古事類書他	年代不詳			二冊	九三
古事類書(仮題)	年代不詳			一冊	九二
畫引十體千字文綱目	嘉永二年三月	(初版宝永一年六月)		一冊	一六
習字三體書翰文	大正九年	堀田相爾著、玉木本三郎書		一冊	一七
統通俗算法木集(上前五十)	天保十三年正月	波多江勸左衛門		一冊	六一の一

2 歴史・地誌

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
△表題欠▽（三、四之巻）	天保十五年正月	波多江勘左衛門	一冊	六一の二

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
皇朝畧史（一之上）	明治二十一年八月十九日		一冊	七〇
王代一覽（巻一）	享和二年（ <small>九</small> ）		一冊	七一
出雲国造伝統略	明治十四年五月十六日		一冊	七二
曾我物語（巻五）	年代不詳		一冊	七三
太平記評判理盡大要鈔（巻十六、二十）			二冊	七四
太平記評判理盡大要鈔（巻二十、三、三十一）			二冊	七五
太平記評判理盡大要鈔（巻三十四、五）			二冊	七六
世帯平記雑具咄（仮題）	年代不詳		一冊	一二七
<small>天明</small> 京都めぐり	享保三年	（天明四年再刻）	二冊	一九
日光山名跡誌	享保十三年二月	（天保十一年二月改版）	一冊	七七
増補高野山独案内	年代不詳	仁徳寺蔵版	一枚	五六
筑前国統風土記	安永七年正月吉日	貝原益軒編、波多江長三郎種保写	一九冊	二一
福岡縣地誌要略（完）	明治十三年		一冊	七八
西国名所巡礼記（仮題）	年代不詳		一冊	八〇

3 実 学

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
筑前三十三ヶ所観音靈地三十三所順札札所 志摩郡観音三十三ヶ所靈場 西怡土郡准四国八十八ヶ所 福岡県下糟屋郡新四国八十八箇所巡拝図	年代不詳 年代不詳 明治十八年十月 年代不詳	(他に早良郡中三十三ヶ所観音靈場を含む)	一冊、他二枚 一冊 一枚	三三 八一 八二 五五

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
諸薬効能書(仮題) 中風不発用心薬・中風御様之妙薬 諸薬効能書(仮題) 料理通(初篇・二篇・三篇・四篇) 料理書(仮題) 石田先生儉約丸(仮題)	年代不詳 年代不詳 弘化四年二月吉日 文政五年三月 年代不詳 年代不詳 年代不詳	書林永楽屋東四郎、他 (当流料理献立)	一冊 一冊 二冊 一冊 一冊	一〇一 一〇二 一〇三 二〇 六二 〇〇

口文 芸

1 和歌・俳諧他

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
俳諧連歌集 俳諧連歌集(仮題) 筑前国巡礼歌(仮題) 志摩郡霊場巡礼歌 短冊 増補唐詩材(卷一、卷四) 當麻中将姫和讃 樽桑歳時記(卷之六、七) 日本歳時記(卷之一、四、五)	安永三年二月 年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳 貞享五年三月発刊		一冊 一冊 一冊 一冊 三枚 一冊 一冊 一冊 三冊	九七 九八 八四 八五 五九 九六 九一 一四 九五

2 諸 芸

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
宝蔵院流十文字鎌之法御相 伝三付 為法度起請文前 書之事 将基袖珍手段 全部	寛政十二年二月十三日 享和二年夏	古賀忠次	一通 一冊	三九 二八

八 教 育

1 教訓書・手鑑

史料名	年 月 日	摘 要	数 量	整理番号
養生訓(一〇八)	正徳三年正月吉日	貝原篤信	四冊	九九
商売往来	寛政八年(五)	(曾我状、他)	一冊	一〇四
田舎往来	年代不詳	(日野俊基朝臣関東下向)	一冊	一〇五
往来物	文政六年(九)	(文化三年再版、書状の文例)	一冊	一〇六
往来物(仮題)	年代不詳	(五畿内、諸道)	一冊	一〇七
諸通文鑑(下)	寛政十二年發刊		一冊	一〇八
書通	寛政十二年四月		一冊	一〇九
手習文例(仮題)	年代不詳		一冊	一一〇
手習文例(仮題)	享和三年(九)	(文例)	一冊	一一一
要文章	天保三年	(教訓書)	一冊	一一二
手習い書	寛政九年秋一日	(手習)	一冊	一一三
作文筆記簿	年代不詳	波多江豊七	一冊	一一四
試筆	天保四年一月一日		三冊	一一五

2 中、小学教科書

史料名	年 月 日	摘 要	数 量	整理番号
高等小学日本史(甲種三之卷)	明治二十七年		一冊	一一六

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
改訂中等国語教科書(卷一、卷二)	大正十五年	吉沢義則編	二冊	一一七
尋常小学国語読本(卷七)		文部省	一冊	一一八
修正高等小学校第一読本(上卷、下卷)		佐沢太郎編	二冊	一一九
高等読本(四)	明治二十六年	山縣悌三郎編	一冊	一二〇
小学初歩(全)	明治十五年	星野彦三郎他編(いろは図、片仮名、平仮名など)	一冊	一二一
高等小学習字本(卷一)	明治十九年	吉田利行編、村田梅石書	一冊	一二二
高等小学書キ方手本 第二学年用(下乙種)	大正四年四月	文部省	一冊	一二三
中学習字帖(中・下卷)	大正二年十月	北島霞江編、玉木本三郎書	二冊	一二四
実科女子理科教科書	大正七年	藤井健次郎、他	一冊	一二五
日本地理初歩(卷之下、甲種)	明治十七年二月発刊	千家尊福	一冊	一二六
教旨大要(全)	明治二十七年五月十二日	大社教管長千家尊愛と波多江種儀宛	一通	一二七
補権訓導状				五二

G 宗 教
イ 神 祇

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
筑前州志摩縣波多江邑倉稲魂神本縁	享保二十年冬	(明治十年写)	一冊	一三〇の一

口 仏 教

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
筑前国志摩縣波多江邑十六天神本縁 八幡宮御祭礼御神幸行列之由来 筑前国志摩郡波多江邑金鳥山西方寺祖厓種賢権現略縁記 筑前国怡土郡高祖大菩薩末社八幡宮及由来写 原田神社建設費募集名簿 桜井与止姫大明神縁起(全) 伊勢参宮日記帳 被詞・神拜詞(仮題) 大明神一ツ松之図	享保二十一年 天保十二年 文政九年十月 仁平二年春(写年不詳) 明治二十六年 明治二十七年春 嘉永七年二月二十七日 年代不詳 天保二年	(慶応四年写) 波多江村大字波多江 波多江六右衛門写 (筑前国式内十九社名)	一册 一册 各一册 一册 一册 一册 一册 一册 一册 一枚	一三〇の二 一三〇の三 二七 一三〇の四 一三〇の五 二八 三六 三〇 八三 五三
鳴渡山音聲寺縁起 萬蔵山光明寺由来(全) 天慶武公八百五拾回忌、隆国寺殿三回忌、御法事ニ付参拜人数記帳写	天正十五年三月十四日写 明治二十七年写 天保二年六月	(他に、惠利内蔵助暢堯事を含む) 波多江六右衛門種徳 怡土郡高祖金龍寺	一册 一册 一册	二五 二六 二九

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
本堂幕寄進帳 永代常夜燈々明料帳(全) 龍国寺由来記 従旧二月廿日授戒会、戒第簿 覺 某和尚偈 長日護摩講人名帳 長日護摩講人名帳 新版増補諸陀羅尼(元) 普門品第二十五 高王觀音經 西山浄土勤行式(全) 照烈院殿月叟隆心大禪定門香奠帳	慶応三年三月 明治三年秋 明治九年九月 年代不詳 四月 年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳	金龍禪寺知事(開山瑞觀禪師三百五十回遠忌) 志摩郡徳心寺知事 小松仁祠守塔敬白 龍国寺 原田三右衛門方金龍寺御納所宛(寺納付金) 沙門信空肅写 屏風浦白方海岸寺 屏風浦白方海岸寺	一冊 一冊 一冊 二冊 一通 一通 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊 一冊	三七 三四 三八 三一 一三二 五八 三五 八六 八七 八八 八九 九〇 三二

H 日記・記録他

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
書状写 書状写 身代證文之事	年代不詳 二月十五日 年代不詳	(新造の絵像開眼の件) 原田大蔵種實方波多江助四郎宛(去夏中の天慶武公八百五十遠忌執行の件)	一通 一通 一通	四九 五〇 一五

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
身代證文之事 領収書 覚 覚 雑 雑 雑 雑 宅相地図	明治二十年一月 明治二十四年、他 年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳 明治二十二年八月	怡土郡白石安五郎の波多江村波多江儀右衛門宛(他に、写あり) 長三郎の儀平宛(請取、他一通) (他に、一綴を含む) 波多江儀右衛門	一通 一袋 一袋 一袋 一綴 一通 一袋 二枚	四二 一三六 一三三 一三四 六八 六九 一三七 五四

波多江大治氏所蔵文書 (一九八〇年二月八日 調査)

史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
波多江氏系譜(卷一、卷二) 波多江家系譜(卷二) 横山氏系図 横山略系図	年代不詳 年代不詳 年代不詳 年代不詳	〔波多江氏系譜〕卷二の続き 〔横山氏系図〕より作る	一卷 一卷 一冊 一通	一 二 三 四

波多江佐二氏所蔵文書 (一九八〇年二月八日調査)

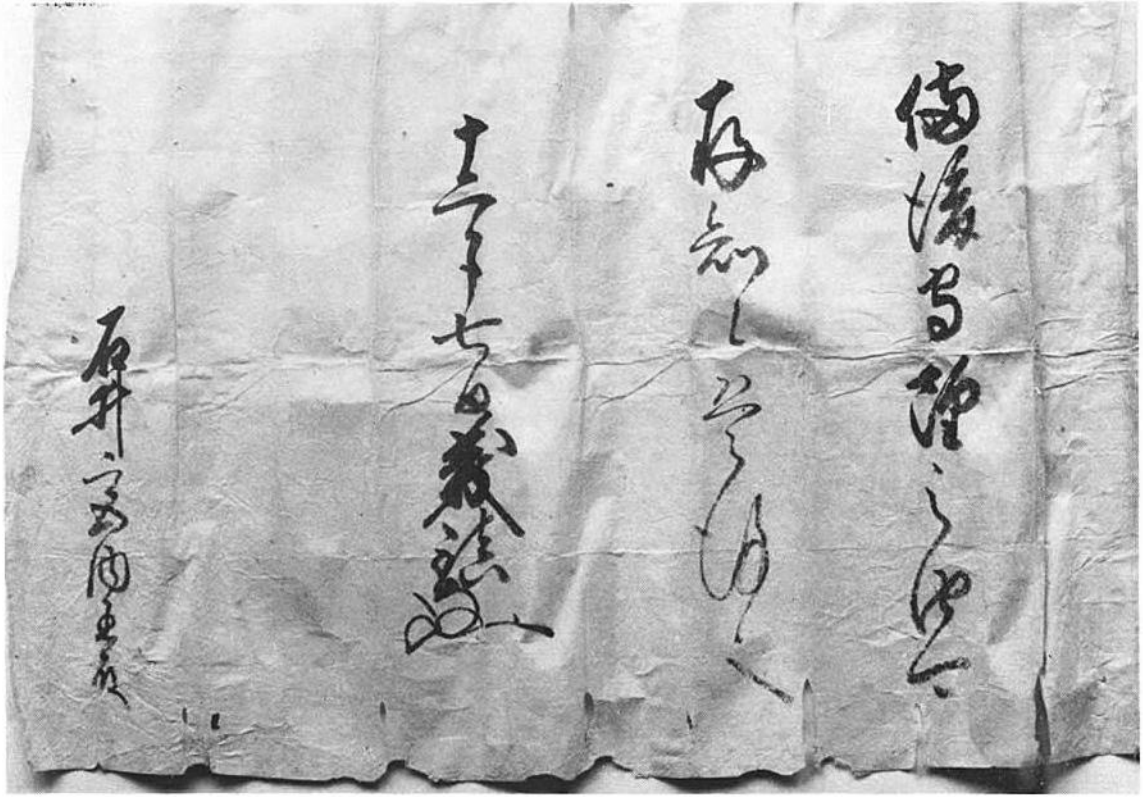
史料名	年月日	摘要	数量	整理番号
波多江氏系図 志摩郡波多江村御献上早米 由来書写 志摩郡波多江郷御献上早米 由来書写 書付	天保二年七月 文化四年四月 明治四年七月 八月十四日	庄屋長三郎改(追々書上仕分集) 黒田家職方波多江卯三郎宛(早米献備の褒賞、出福の件)	一通 一冊 一冊 一通	四 一 二 三

図 版

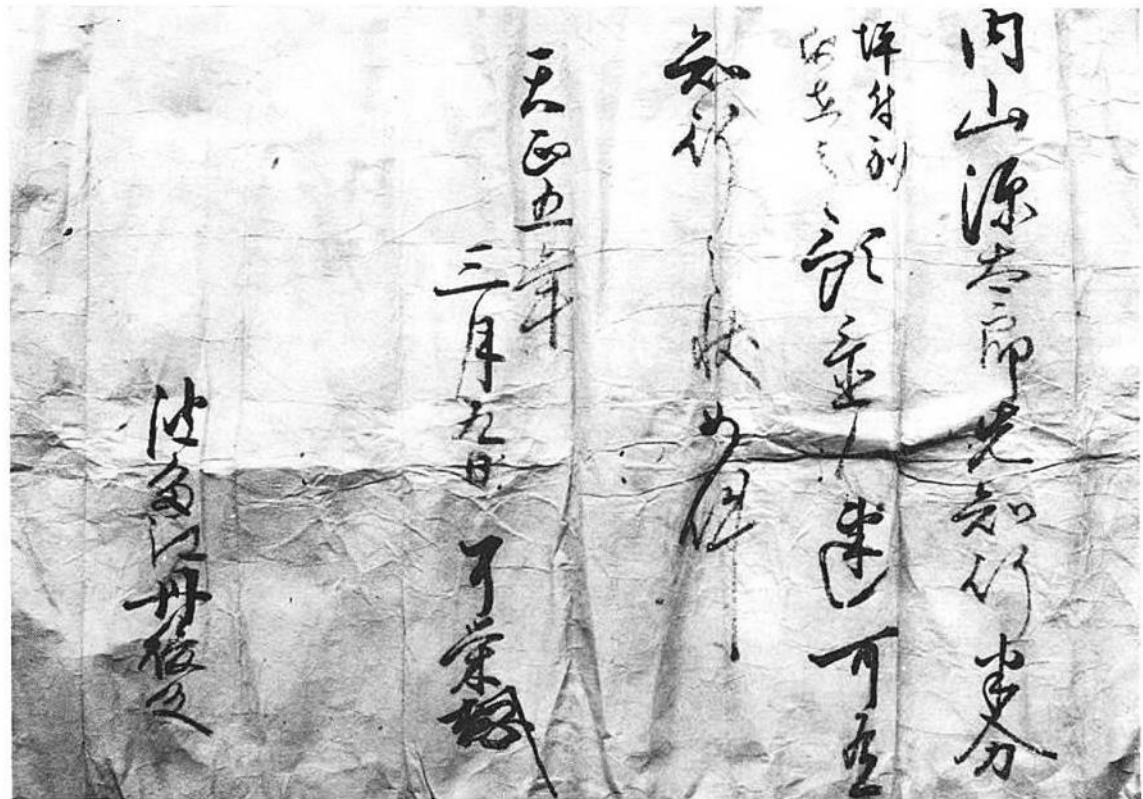
図 版 目 次

- 図版 1 上……………大友義鎮官途状
下……………原田了榮預々状
- 2 上……………原田了榮加冠状
下……………原田了榮坪付状
- 3 上……………原田信種感状写
下……………原田了榮・信種連署宛行状
- 4 上……………波多江家感書写
下……………同 上
- 5 上……………同 上
下……………同 上
- 6 上……………同 上
下……………同 上
- 7 上……………同 上
下……………同 上
- 8 上……………同 上
下……………原田系図
- 以上波多江稔氏所藏文書
- 9 上……………軍忠宛行状写
下……………同 上
- 10 上……………波多江氏系譜卷
下……………同 上
- 11 上……………同 上
下……………同 上
- 12 上……………同 上
下……………同 上
- 13 上……………改正原田譜
下……………同 上
- 以上波多江正実氏所藏文書
- 14 上……………波多江氏系譜
下……………同 上
- 15 上……………同 上
下……………同 上
- 以上波多江大治氏所藏文書
- 16 上……………志摩郡波多江村御献上早米由来書写
下……………同 上
- 以上波多江佐二氏所藏文書

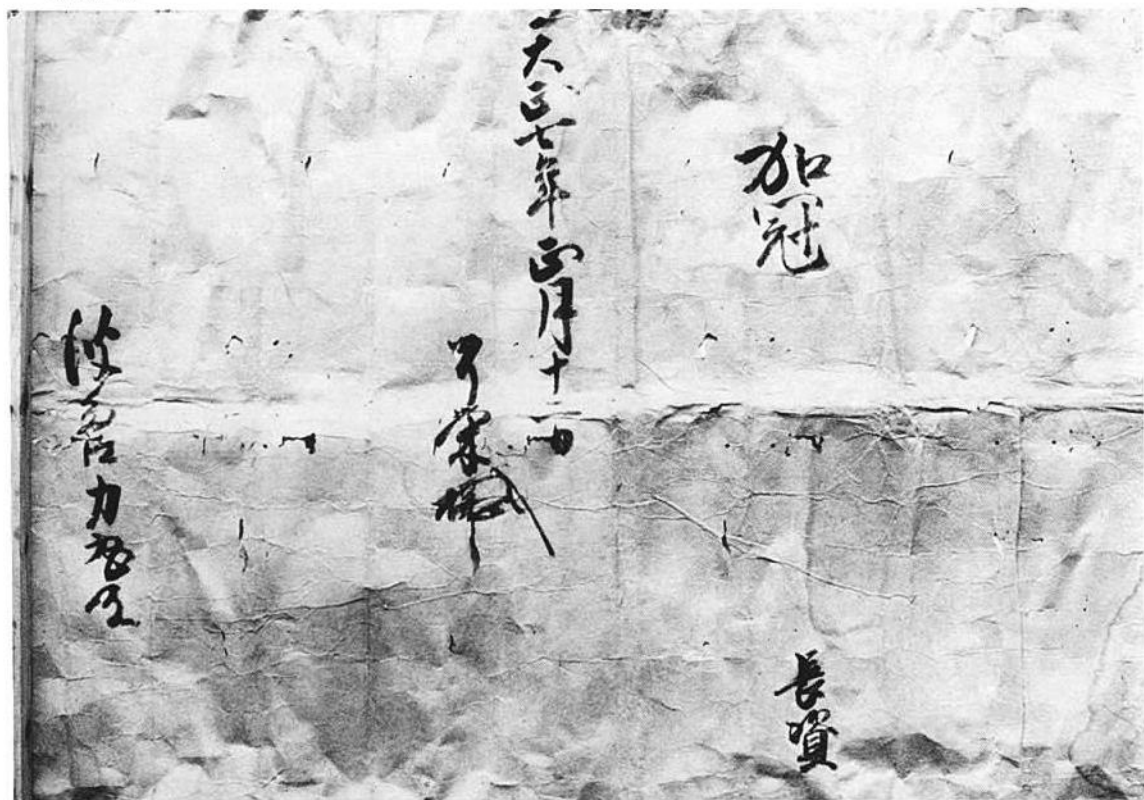
圖 版



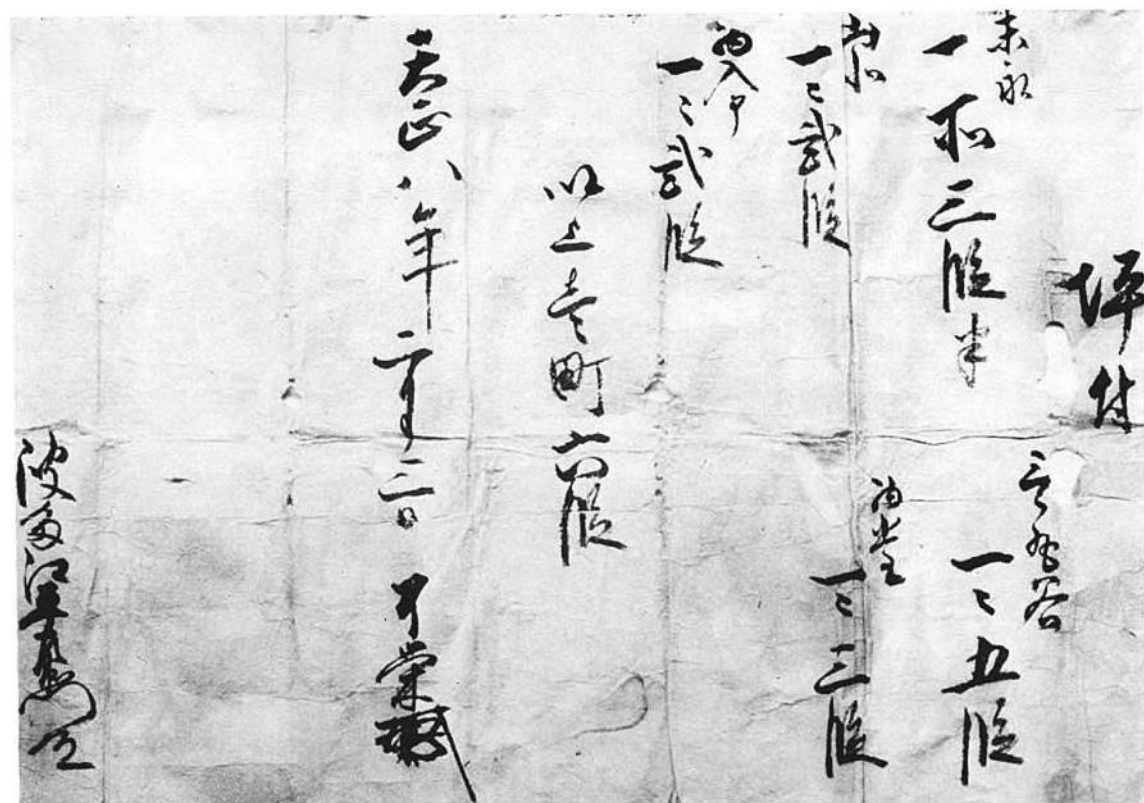
大友義鎮官途状



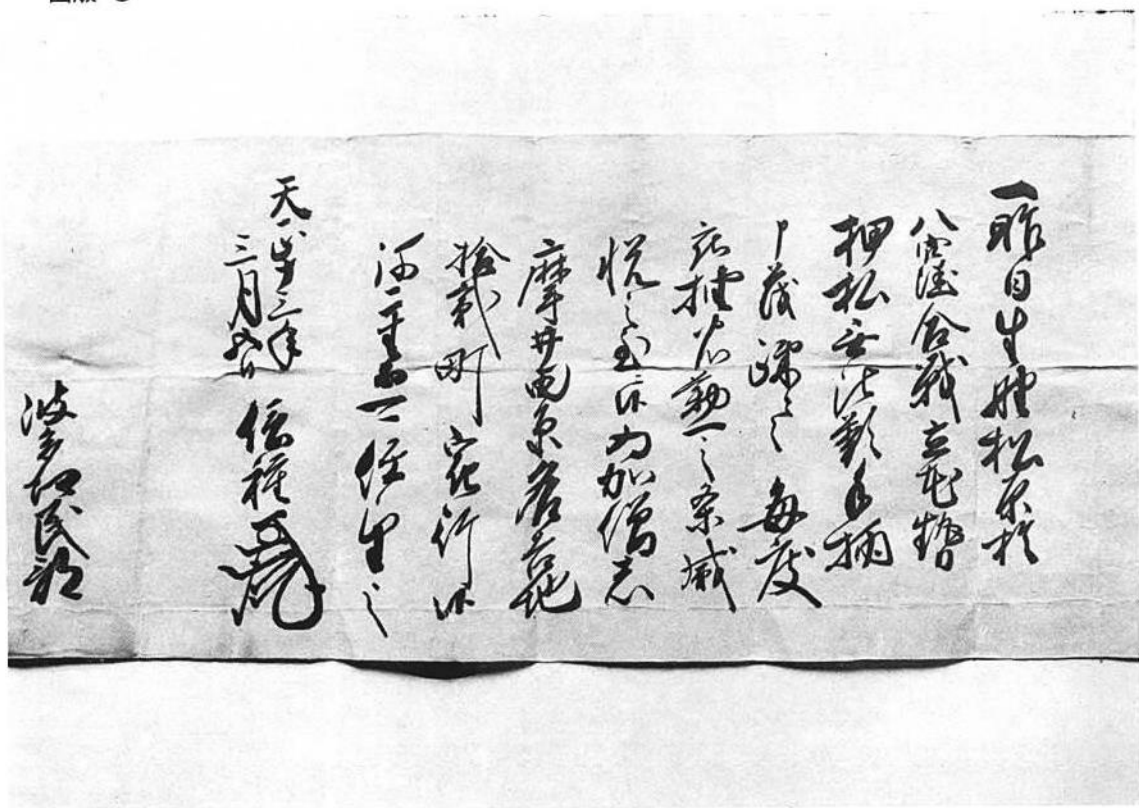
原田了榮預ヶ状



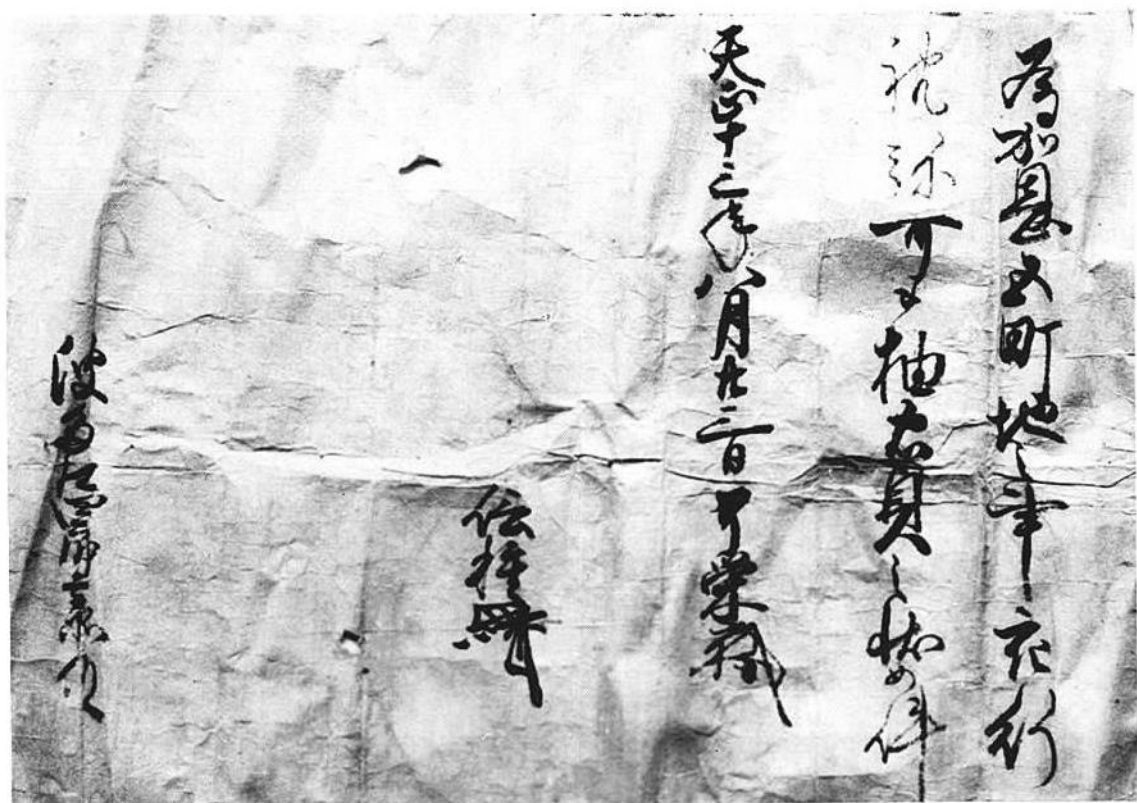
原田了榮加冠状



原田了榮坪付状



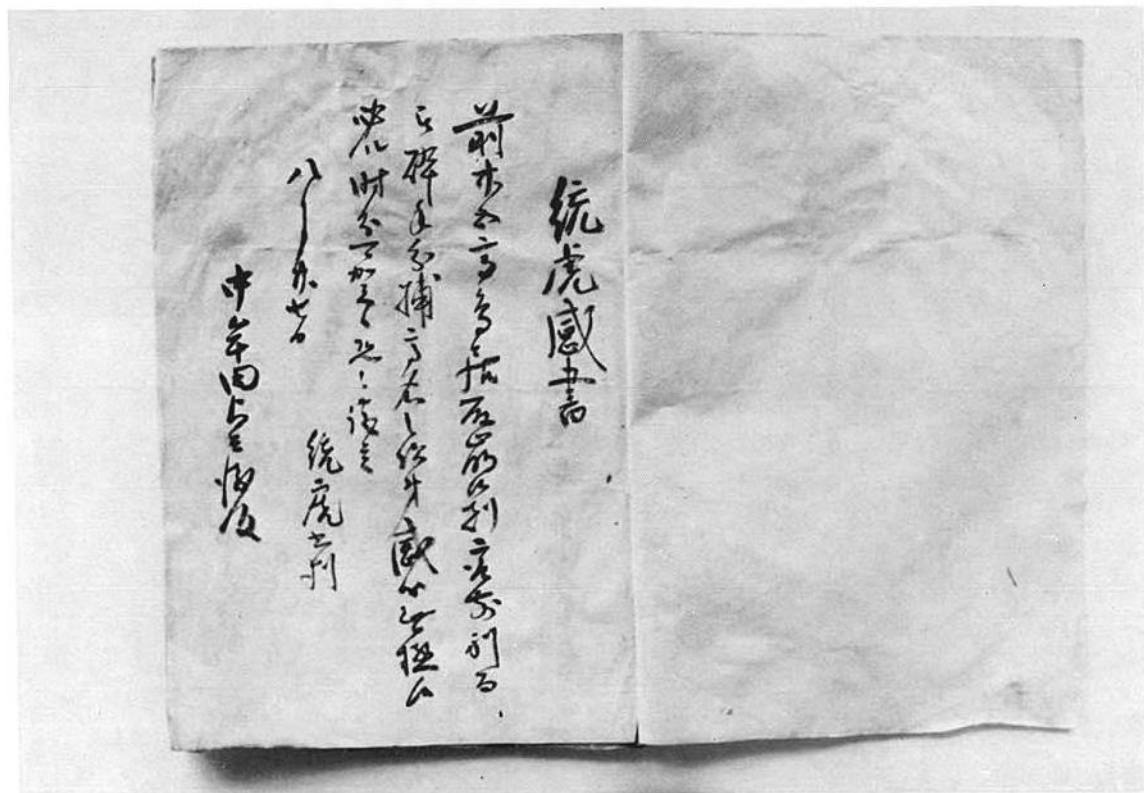
原田信種感状写



原田了榮・信種連署宛行状



波多江家感書写



同上

右中田田舎信... 細江掃部... 大友家感書... 前分... 飛松... 上り... 宗禪... 池田... 拾所...

波多江家感書写

下... 池田... 義統... 池田... 義統... 池田... 義統...

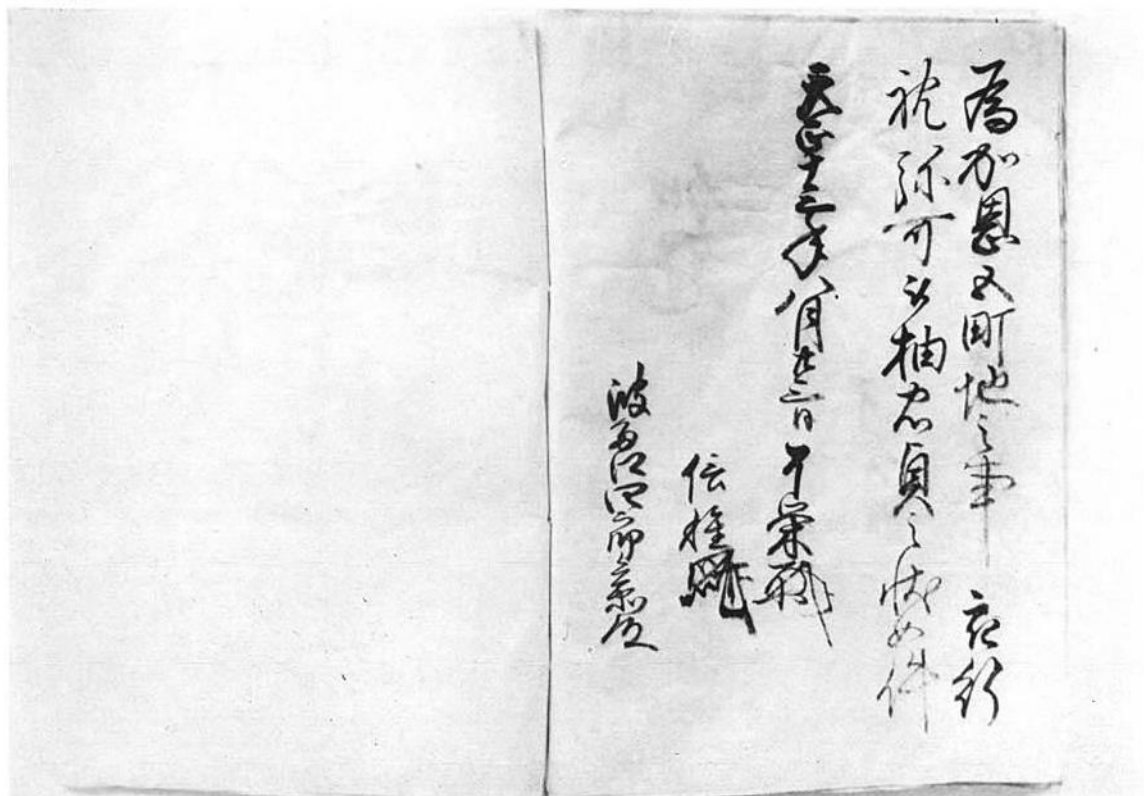
同上

<p>天正七年正月十二日</p> <p>了案</p> <p>波多江力丹及</p>	<p>加冠</p> <p>長資</p>	<p>未取 一而三候半</p> <p>一而三候</p> <p>一而三候</p> <p>一而三候</p> <p>天正八年二月一日</p> <p>波多江力丹及</p>	<p>坪分</p> <p>一而三候</p> <p>一而三候</p> <p>一而三候</p>
--	----------------------------	---	---

波多江家感书写

<p>天正七年</p> <p>三月九日</p> <p>了案</p> <p>波多江力丹及</p>	<p>内山源左衛門 先知 乃事分</p> <p>取立人米 可及知以 於此</p> <p>天正七年 三月九日</p>	<p>右 感言 波多江 乃 乃事分</p> <p>右 感言 波多江 乃 乃事分</p> <p>右 感言 波多江 乃 乃事分</p> <p>右 感言 波多江 乃 乃事分</p> <p>右 感言 波多江 乃 乃事分</p> <p>右 感言 波多江 乃 乃事分</p>
---	---	---

同 上



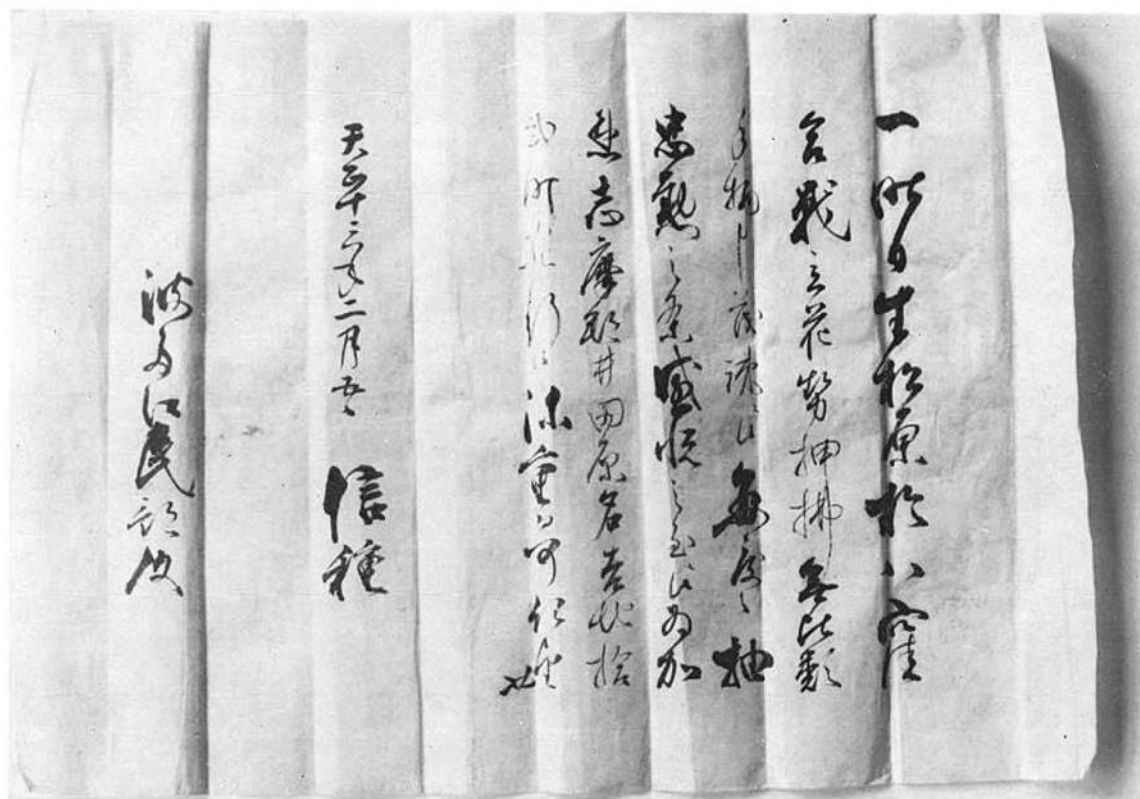
波多江氏系譜



原田系圖



軍忠宛行状写



軍忠宛行状写



波多江氏系譜卷

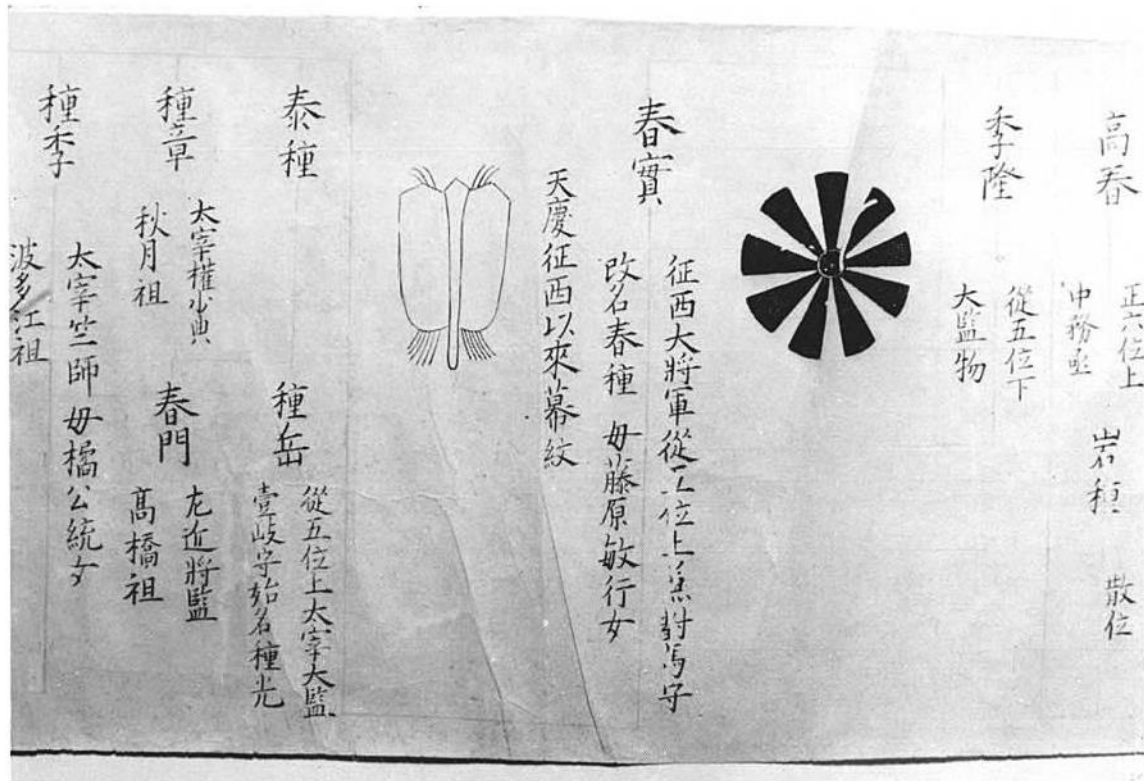
夫大藏姓於漢劉姓遠祖者漢太祖高皇帝末後漢高祖光武皇帝十四世帝協獻帝中子十五代孫阿多陪王南漢霸王時天下為唐代後貞觀年中薛漢王位入和國稱高貴王任內大臣云云

齊明天皇嫁女帝產三皇子第一王坂上連祖弟二王大藏朝臣祖弟三王內藏連祖中子貴重王之時始賜大藏姓自爾已來十二代之後亂對馬守春實朝臣

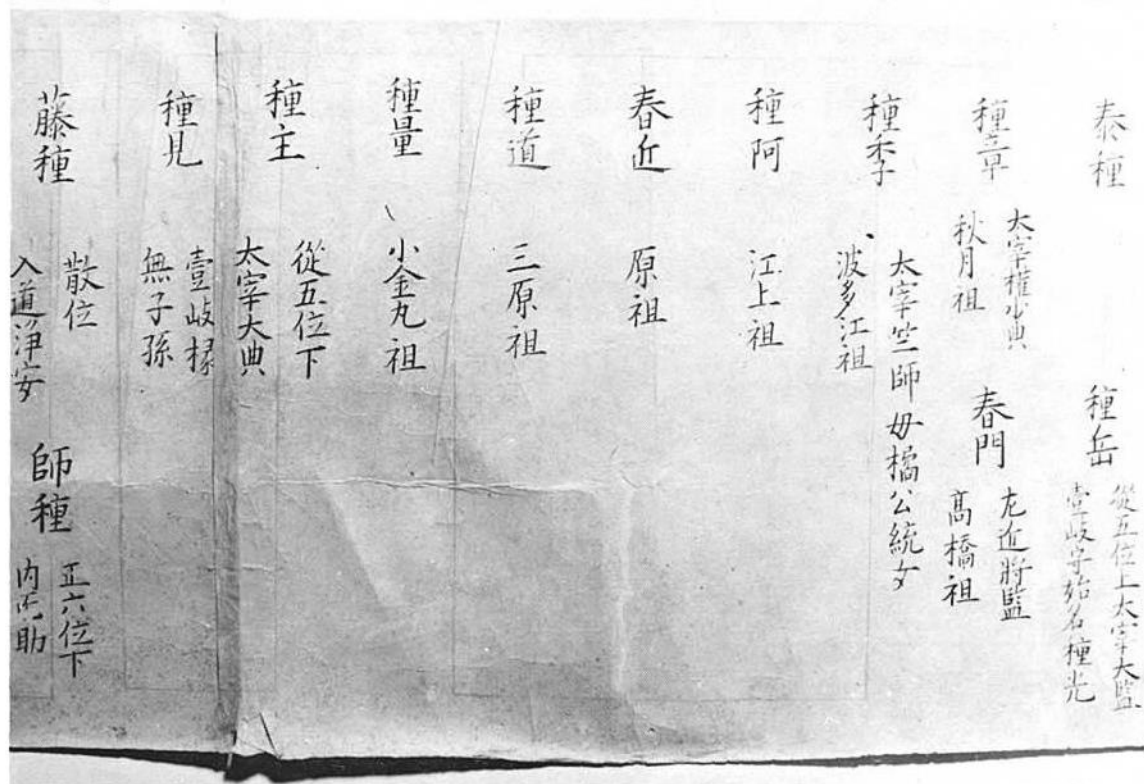
朱雀天皇御宇天慶三年庚子五月賜錦御旗軍配蒲團扇追討逆臣藤原純友依勲切賞而為征西將軍豐前統前肥前壹岐對馬管領三前二嶋改名春種統前國御笠郡居住原田館

後漢第一後漢高祖光武皇帝漢太祖高皇帝九代孫
字文叔在位三十三年

第三明帝永平十二年以釋迦像
共銀台天下十八



波多江氏系譜卷



同上

龍太郎

跋

波多江儀平種儀家世所傳之家系
 譜自大祖後漢高祖先武皇帝始訖
 于波多江丹後守種賢焉間嘗竊種
 儀欲記載其先種連以降之世襲於種
 賢之下一日來就余謀焉余嘗種連種
 益種教之三代不詳其枝葉故其族區
 々所傳之聚畧譜四種則合替拾此採
 彼記載種連以下至種貞十二代本主
 枝葉之順次而以傳後葉云

昔明治第七次甲戌新曆八月廿四日
 曆七月十三日橘朝臣和種誌之

波多江氏系譜卷

種名

美氣四郎
對馬掾

種貞

波多江別當三郎太宰大監實原
 田筑前權守種雄三男六宰少戴
 筑前守種貞弟母龙馬助平家
 盛女 壽永二年平家西海漂
 泊時奉公大忠切人嘉祿二年死
 号道忍文治以前名表三郎
 敦種正六位下太宰大監

種遠

波多江太即母土佐房利直攝
 公朝女又名坂井兵衛寬元三
 年三月十二日死七十七法名道阿
 号清淨寺

種貞

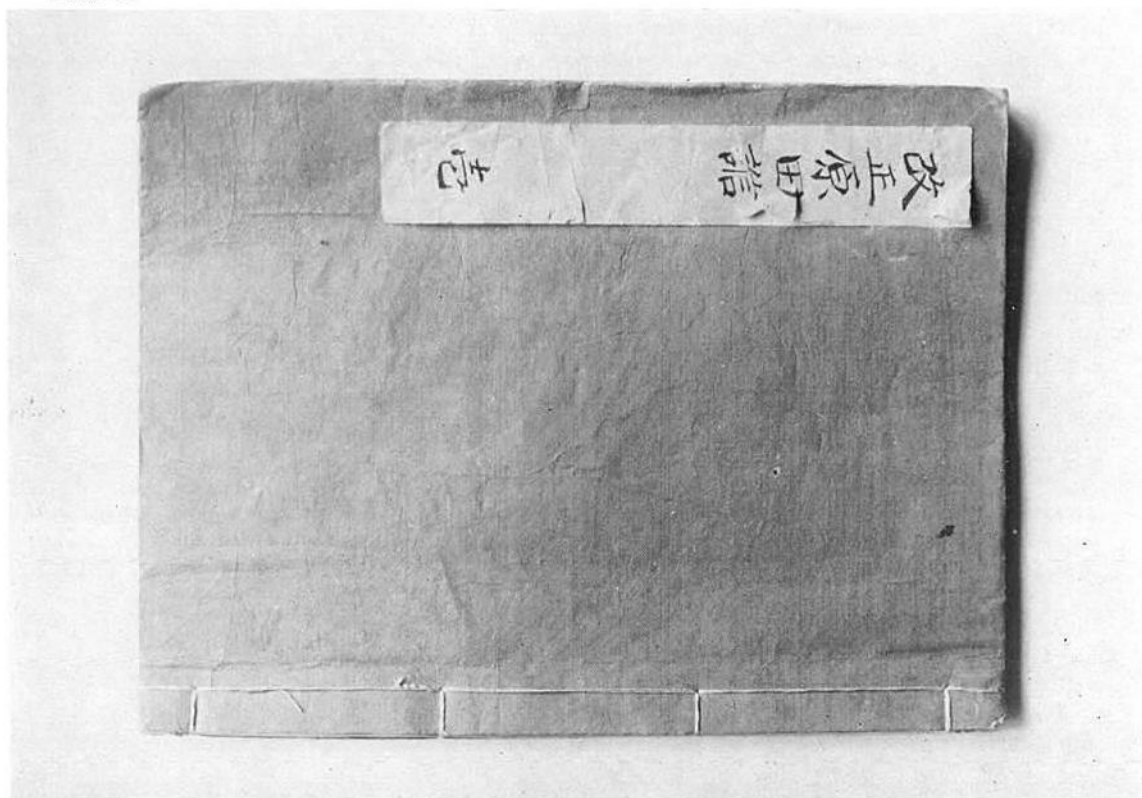
坂井又三郎同母建保元年泉
 小次郎謀叛同意被誅伐

種清

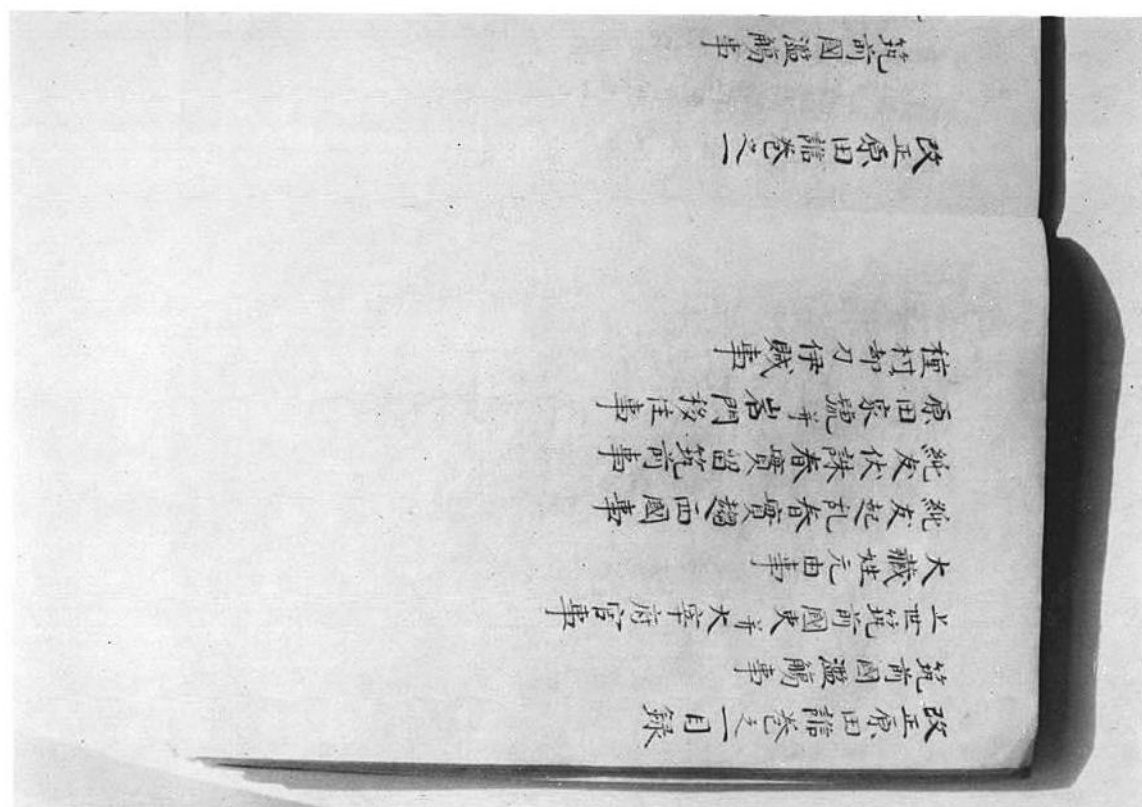
五郎入道号隨有菴
 同母無子孫

種純

母草野次郎大夫永平女
 波多江小太郎入道叔秀



改正原田譜



目録

征西將軍從五位上

春種
兼對馬守初孫春實父從五位下大監物季隆
母藤原政行女筑前國三笠郡原田館居住

恭種

種章 大宰權少典
秋月祖也

種季 大宰監師
波多江祖也母橘公統女

種阿 江上祖

春近 原祖

種通 三原祖

波多江氏系譜

種高

波多江次郎左近將監母秋月四郎女為堀池四郎
遠私於由井濱被害正元元年二月八月法名生蓮寺
了道居士
室重留六郎女建長三年正月十九日平法名法藏妙

種純

波多江太郎入道母草野次郎大夫永平女
建長七年七月廿日平法名大屋叔季居士
室秋月四郎女
康元元年五月十九日平法名禪海妙信心女

種遠

波多江太郎母土佐房判官橘公朝女
又孫坂井兵衛
寬元三年三月廿日平法名清心道阿居士
室草野次郎大夫永平女仁治二年七月九日平
法名性安妙元大姉
貞隆坂井三郎母同建長元年泉次郎孫敬司意波誅成
宣清五郎入道等隨有庵母同無子孫

種真

波多江判官三郎大宰大監實原由筑前守種雄三男
太宰少貳筑前守種直弟母左馬助平家盛女妻元
二年平家西海深泊時奉公文忠切嘉録二年八月
二十五日平法名山守道忍居士室土佐房判官橘公
朝女安貞二年十月廿日平法名鶴壽如學大姉

波多江氏系譜 卷二

女子 青木遠江守室同
政直 室修理亮同
女子 中村勘右衛門室同

政宗

稱波多江上總守後改稱丹波守種教二長子也
後入道初稱宗舍母平山甚登守女

清豐

稱治部少輔為油比紀伊守之猶子母同前

盛言

稱長野三郎天文二年六月遭害於周防國佐波郡母同前

能氏

稱長野右京亮後復稱波多江母同前
宗長 為小田國幡守紹麟之猶子母同亦

基宗

稱波多江長門守初稱太郎討死於草野母入江三郎與連女

鎮種

稱波多江上總守初名小次郎元龜三年戰死於吉井濱母同前

波多江氏系譜

稱波多江備後守母平山五郎女

宗憲

稱備後大將在衛門外津喜齋松堂

種豐

稱波多江彦太郎

宗能

稱波多江對馬守無子以種賢子左近亮為猶子住池田村

種廣

稱波多江左馬之助母重富六郎政隆女後改名貞俊於種子初以弟種宗為世嗣讓家督開居刺業以天正十九年七月七日卒其諡秋山淨清居士室深江七郎直基女也以天正十三年三月五日卒其諡宝山妙光信女

女子

早世

種則

稱波多江上總介初名小次郎母同前天正中信種為豐臣秀吉降助地於筑後熊本因從信種往於彼地而為佐之成政之麾下成政滅亡後屬加藤清正麾下征伐朝鮮信種遂戰死其子喜種受嗣時清正將嫁女毛利氏使其母勝喜種不肯大忿訴秀吉沒其奉邑喜種去先是種則始從仕信種及有此漂浪退蟄居長野

種宗

稱波多江左馬五初名平十郎母同前為種廣之猶子與元種則從信種於熊本同征伐朝鮮喜種憑寺澤氏退歸波多江舊墟

種成

稱波多江宇右衛門母矢野善大夫女也

種和

稱波多江左衛門

櫻下中老中孫上長上小以奉
 右之通下弟元空長月長田治長住事上小
 取通一全作長長上上

享保四年
 十二月廿三日

山中長古孫

早米撰下長上小分

長外孫	平島孫	宇長孫	式部孫
長長孫	六角孫	飯負孫	安房孫
長長孫	空也孫	北七孫	源左孫
長長孫	長長孫	長長孫	長長孫
長長孫	長長孫	長長孫	長長孫

波多江村長
 久七
 長七

志摩郡波多江村御献上早米由来書写

文化四年 卯四月

志摩郡波多江村御献上早米由来書写

此下書上長上集
 左長上上所代及

同上

今宿バイパス関係埋蔵文化財
調査報告 第6集 下巻

昭和57年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4丁目15-17